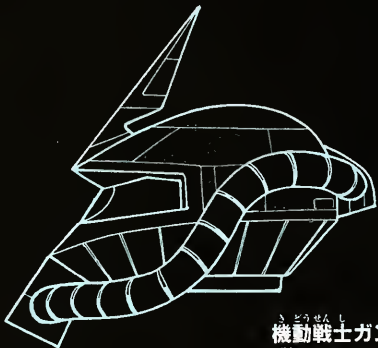


MSV

MOBILESUIT VARIATION

TECHNICAL HANDBOOK

MS・MA



き どう せん し
機動戦士ガンダム

ぐん もビル スーツ もビル アーマー へん

モビルスーツバリエーション② ジオン軍MS・MA編

MS-07 SERIES

ワイ エム エス

YMS-07

プロトタイプグフ

MS-07シリーズは、MS-06
ザクIIにつぐ新型陸戦用モビルスーツ
として開発された。機動性と格闘戦性
能向上を目的として、装甲を強化、ラ

ジエーターが大容量化され、さらに脚
部に補助推進システムが搭載された。
試作機にはYMS-07のナンバーが
あたえられ、試験終了後、多少の設計
変更をうけて量産化されている。



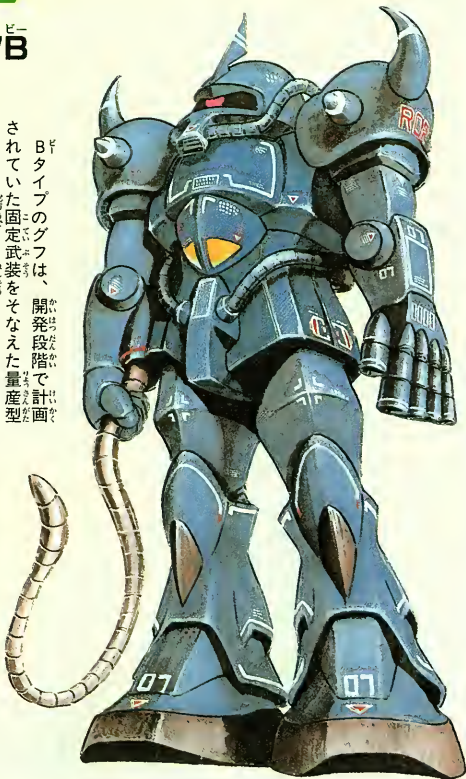
MSV

エムエス ビー
MS-07B

グフ

Bタイプ
のグフは、
開発段階で計画
されていた固定武装をそなえた量産型
である。左腕に五連装七十五ミリマシン
ガン、右腕にヒートロッドを装備し
たことで戦闘力は大幅に向上し、局地
戦においてその性能をいかんなく発揮

した。だが、武装を固定したこと
で、汎用性を失うという欠点があったこと
も事実である。



エム エス
●MS-07Bグフ
カスタムタイプ
マ-クベ大佐機

エム エス ビー
MS-07B
カスタム
タイプ

陸戦用モビルスーツのカスタムタイプは、その多くがMS-06Jタイプがベースになっていた。だが、一部に

はMS-07Bタイプをベースにしたものもあった。そのなかで、もっとも有名だったのが、マ-クベ大佐のグフであった。



MSV MS-07 SERIES

エム エス シー
MS-07C-3

じゅう そう が た
グフ重装型

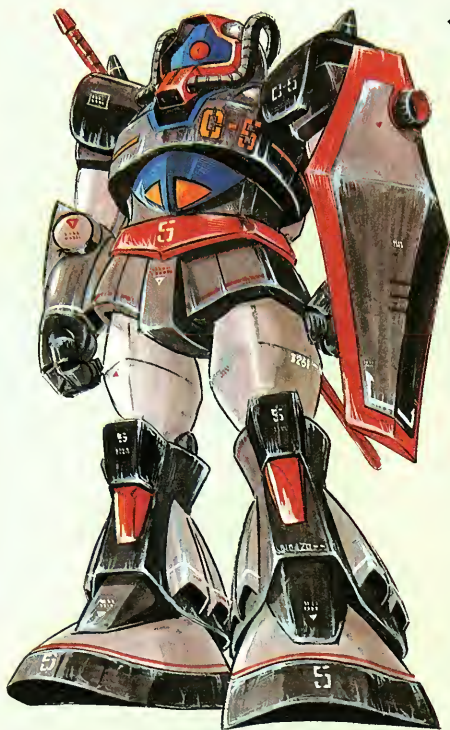
基本装備のままのBタイプでは、多
様化する局地戦の状況に対応しきれな
いことがはっきりした。そのためにB
タイプを改修して、局地戦用のCタイ

プがつくられることになった。この
C-3タイプは、両腕を八十五ミリ五
連装マシンガンにしたもので、ヨ
ロッパ戦線をはじめとして各地で使
用された。



エムエス シー
MS—07C—5

グフ試作機
じっけんき
実験機



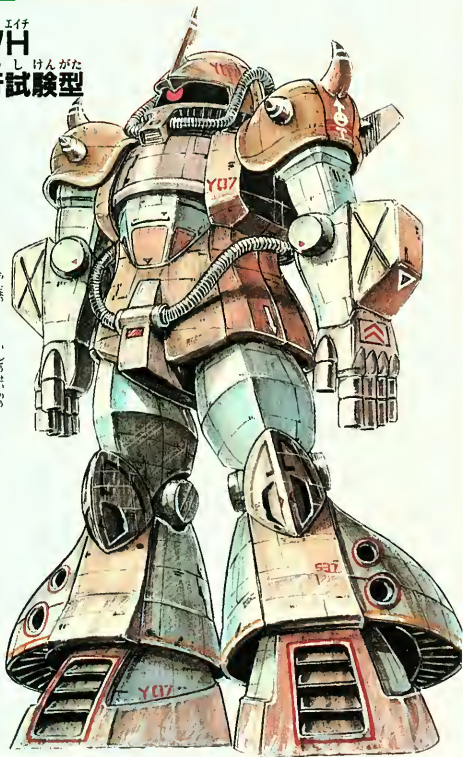
エムエス MS—07C シリーズのうち、もつとも異色であったのが、このC—5タイプであった。この機は固定武装をもたず、ヒートサーベルを標準武装とし、モノアイを十文字形のものに換装したという、グフとは思えないほど型破りのモビルスーツであった。生産は一機のみで、実戦参加の記録はない。

MSV MS-07 SERIES

エムエス
MS-07H
エイチ
グフ飛行試験型

モビルスーツの地上での移動性能の
わるさにこまりはてたジオン軍では、
モビルスーツを飛行させる計画がたて
られた。その試験機として、グフを改

造したMS-07Hタイプがつくられ
た。だが、技術的な問題が解決され
ず、計画は中止されてしまった。
(9)



MS-07 SERIES

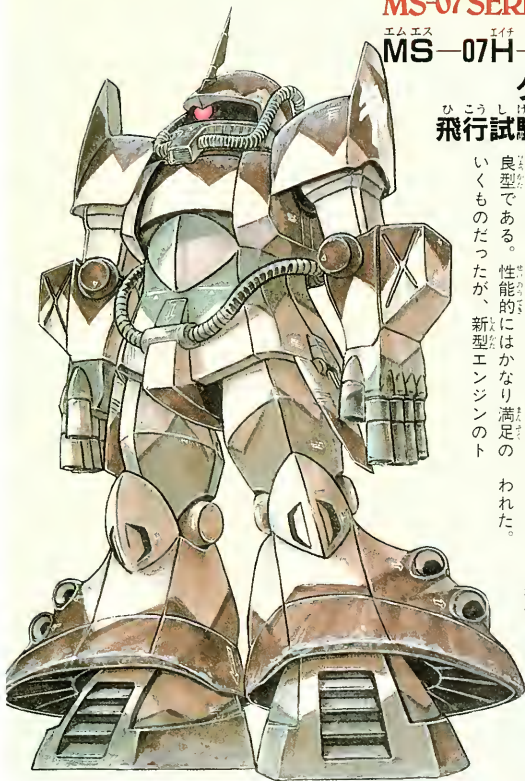
エム エス エイチ
MS-07H-4

グフ

ひ こう し けん が た
飛行試験型

グフ飛行試験型のうち、H-4タイプとよばれる機はHタイプの発展的改良型である。性能的にはかなり満足のいくものだったが、新型エンジンのト

ラブルで、実験開始後十日めに空中爆発をおこし、機体は失われた。



●モビルスーツバリエーション

MSV YMS-08A

ワイ エム エス エー
YMS-08A

こう き どう が た
高機動型
し さ く き
試作機

S
—
0
8
A
で
あ
る
。
新
開
発
の
推
進
エ
ン

新型陸戦用モビルスーツの開発にあ
たって、YMS-07と競作のかたち
で開発がすすめられたのが、このYMS

ジンを搭載し、短距離ジャン
プが可能とされていたが、コストパ
フォーマンスがわるく、開発はMS
—
0
7
に
統
合
さ
れ
る
こ
と
に
な
っ
た
。

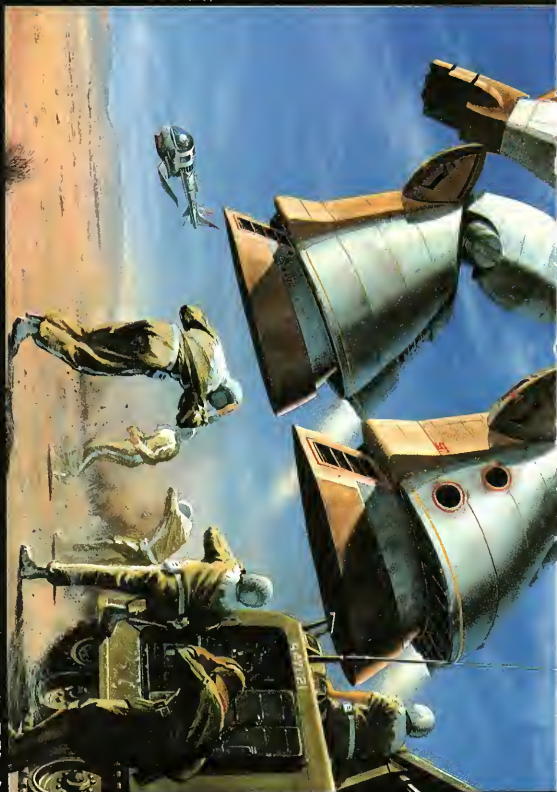


MOBILE SUIT in ACTION

MS-07H



●解説は「六〇ページにあります。」



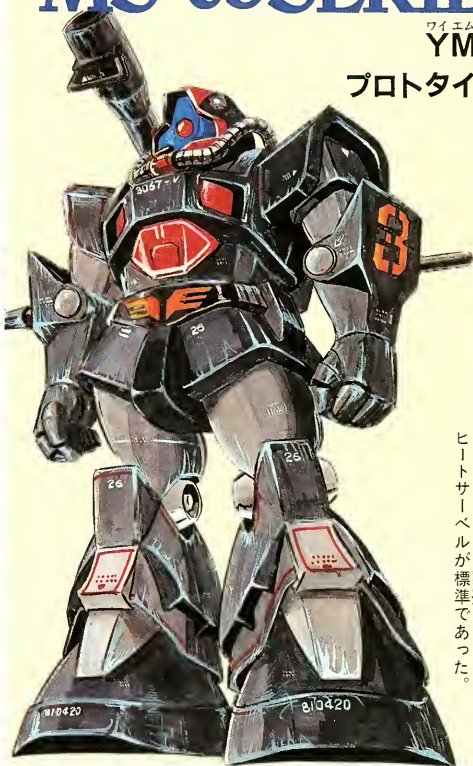
●モビルスーツ イン アクション

MS-09SERIES

ワイエムエス

YMS-09

プロトタイプドム



プロトタイプドムは、開戦から六か
月めに完成したモビルスーツで、陸戦
用モビルスーツの決定版といえるもの

であった。とくに機動性は、航空機な
みの高さをしめした。武装は、同時開
発された三百六十ミリバズーカ砲と、
ヒートサーベルが標準であった。

MSV

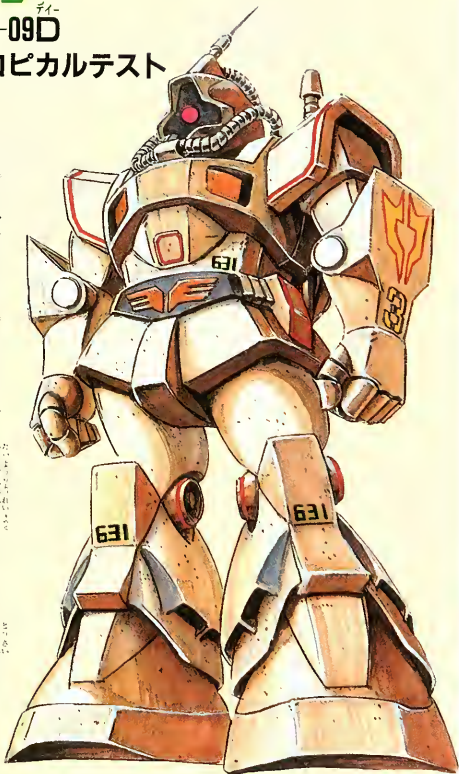
ワイエムエス デー

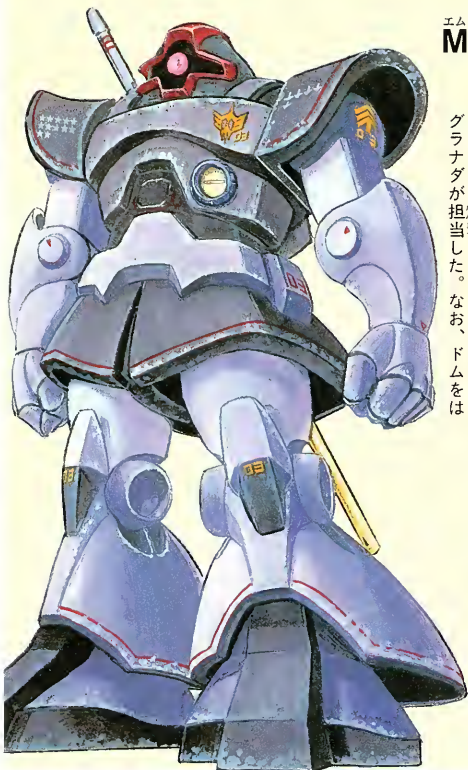
YMS-09D

ドムトロピカルテスト タイプ

トロピカルテストタイプのドムは、
キャリフォルニアベースにおいて、Y
MS-09を改修するかたちで製作さ
れた。補助タンクつきランドセルや、

大容量冷却システムの搭載がポイント
となっている。量産化されたものの、
開発時期がおそすぎたため、実戦参加
したのは十数機程度であった。





エム エス
MS—09
ドム

開発に成功したYMS—09は、ただちに量産にうつされることとなった。生産はキャリフォルニアベースとグラナダが担当した。なお、ドムをは

じめて受領した部隊は、「黒い三連星」で知られる特務小隊であった。

エム エス アール
MS-R09

リックドム

リックドムは、
陸戦型局地戦用モビルスーツとして
開発されたドムだが、基本設計のよさ
をかれ、空間戦用に再開発された。
これがリックドムである。急造とはい

え、総合性能ではゲルググに
およばないものの、Rタイプの
ザクをはるかにしのぐものであった。



MOBILE SUIT in ACTION

YMS-09D



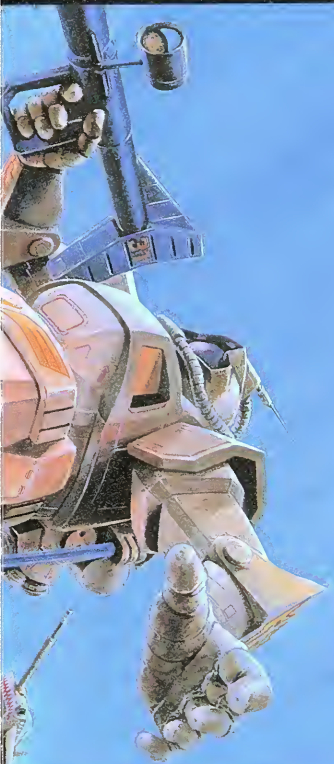
●解説は二六ページにあります。



●モビルスーツ イン アクション

MOBILE SUIT in ACTION

YMS-09D





MOBILE SUIT in ACTION

YMS-09



●解説は一六二ページにあります。



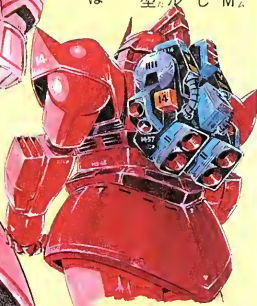
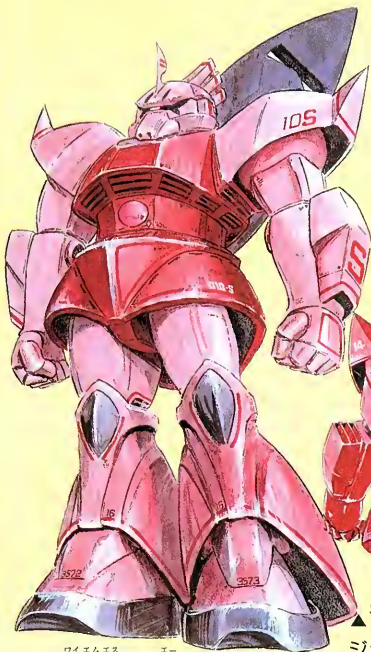
●モビルスーツ イン アクション

MS-14 SERIES

エムエス
MS-14

ゲルググ

エムエス MS-14ゲルググは、M
S-06ザクの後継機とし
て開発された、汎用モビル
スーツである。量産先行型
として二十五機生産され、
これらはYMS-14とよば
れている。



ワイエムエス ビー
▲YMS-14Bゲルググ

ジョニー＝ライデン

ワイエムエス エー
▲YMS-14Aゲルググ
シャア＝アズナブル大佐機

少佐機

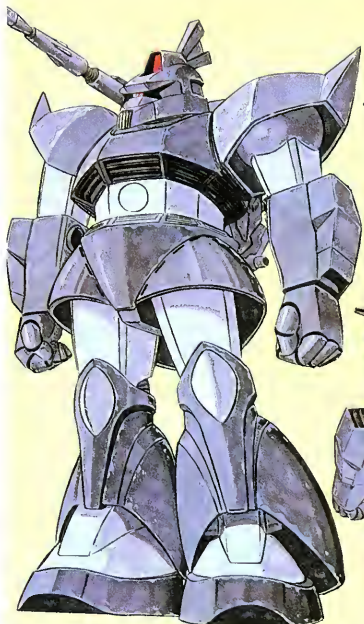
▼MS-14A

ゲルググ



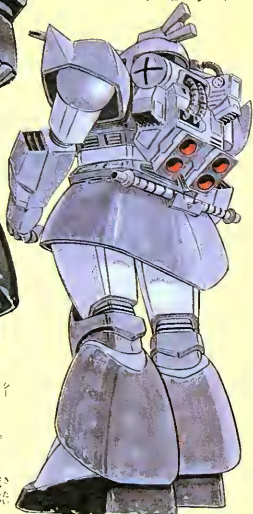
二十五機のYMS-14のうち、一機はシャア・アズナブル大佐にわたされ、他の二十四機はエース部隊へ配属された。YMS-14と量産機は、外観

上も、性能面でも差はなかったといわれる。ゲルググは、ジオン軍初の、ビーム兵器を標準装備とする機種で、今次大戦で量産されたモビルスーツ中、最高の完成度をもつ。



エム エス シー
MS—14C
ゲルググキャノン

エム エス
 MS—14C
 に
 キャノンパック
 を搭載した機種
 を、Cタイプゲ
 ルググキャノン
 とよんでいる。



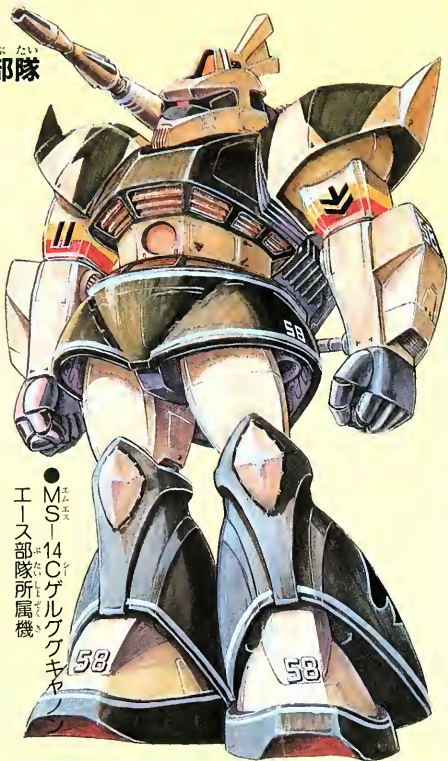
Cタイプの機体
 はAタイプと大差
 なく、頭部サブカ
 メラがちがつてい
 るだけである。
 Cタイプはキャ
 ノン砲をビーム砲
 にすることによつ
 て、ザクキャノン開
 発のネックであつ
 たバランスの問題
 を解決している。

●エース部隊

大戦末期に編成された新部隊で、MS-14を主要兵器としていた。パイロットは各戦線のエースがあつめられ、新編成された部隊にもかかわらず、

戦闘能力は高かった。この部隊には、J-1ライデン少佐をはじめ、J-2サイカイ大尉やT-1クルツ中尉などの名まえが確認されている。

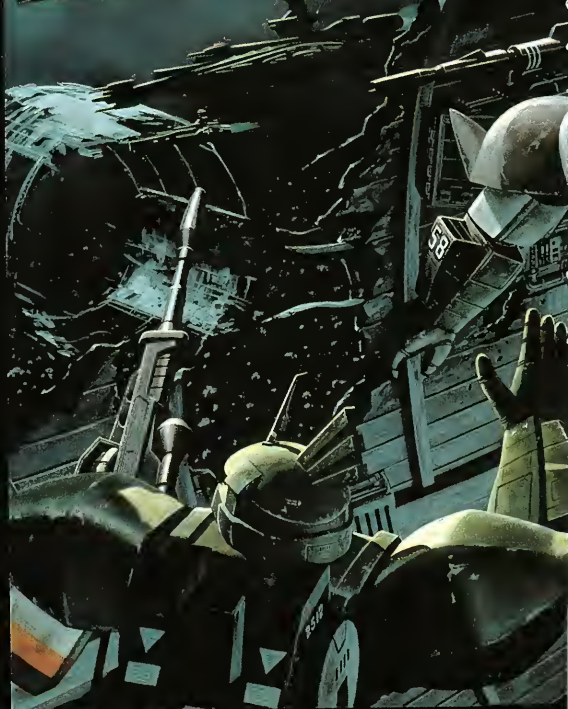
●MS-14Cゲルググキヤン
エース部隊所属機





MOBILE SUIT in ACTION

MS-14C



MOBILE SUIT in ACTION

MS-14



●解説は一六ページにあります。



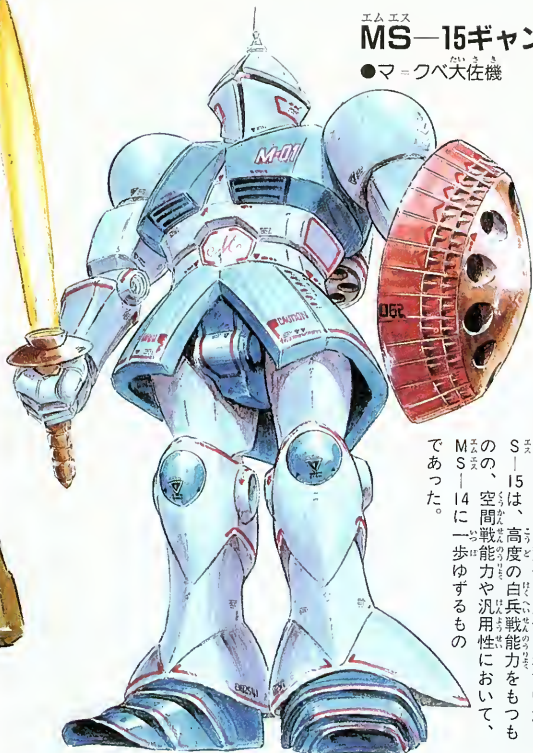
●モビルスーツ イン アクション

MS-15

エム エス

MS-15ガン

●マ = クベ大佐機



エム エス
MS-14と競作で開発されていたMS-15は、高度の白兵戦能力をもつものの、空間戦能力や汎用性において、MS-14に一步ゆずるものであった。

●モビルスーツバリエーション

MSV

MSM SERIES

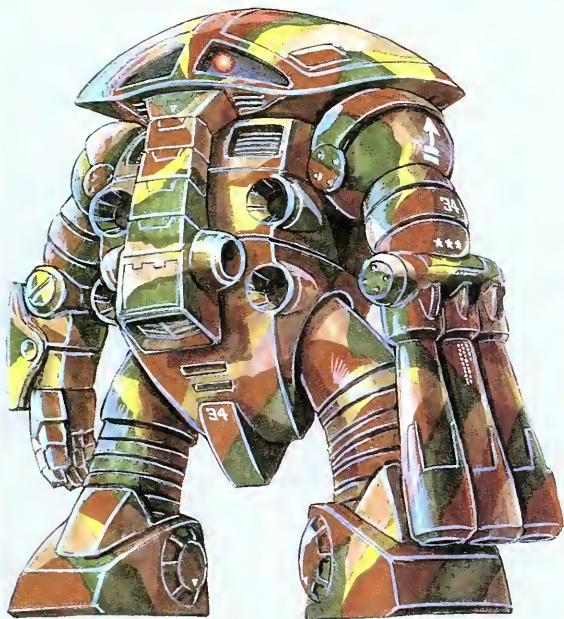
エムエスエム ジー

MSM-04G

ジュアック

光面高機
モビルスーツ





エム エス エム ジー
MSM-04G ジュアック

ジャブロー攻略戦用の特務モビルスーツとして製作されたジュアックは、型式ナンバーからもわかるように、MSM-04アッガイの開発途上でうまれた水陸両用モビルスーツである。

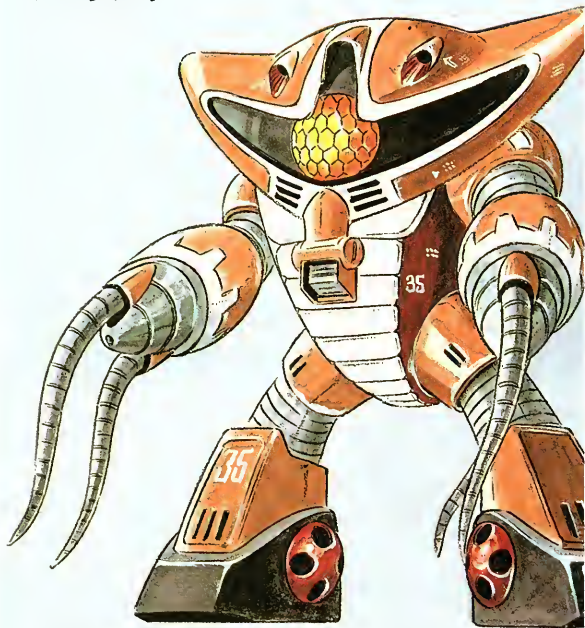
●モビルスーツバリエーション

MSV MSM SERIES

エム エス エム エヌ

MSM—04N

アッグガイ





エムエスエム エヌ
MSM-04N アッグガイ

アッグガイは、ジュアッグと^{どうよう}同様に、アッグガイの試作段階^{し さく だん かい}の産物^{さんぶつ}である。基本的にはアッグガイとかわらないが、ジャブロー攻略戦^{こうりやく せん とう}用に^{せいさく}製作された水陸両用の特務モビルスーツである。

●モビルスーツバリエーション

MSV MSM SERIES

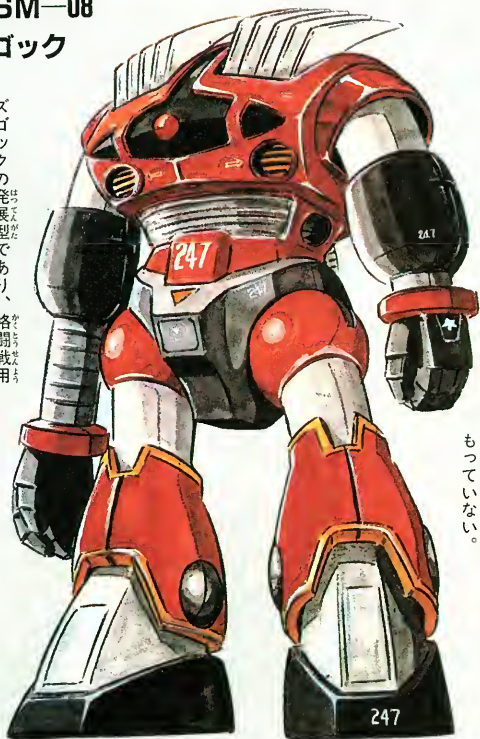
エム エス エム

MSM-08

ゾゴック

ズゴックの発展型であり、
の特務モビルスーツである。

格闘戦用

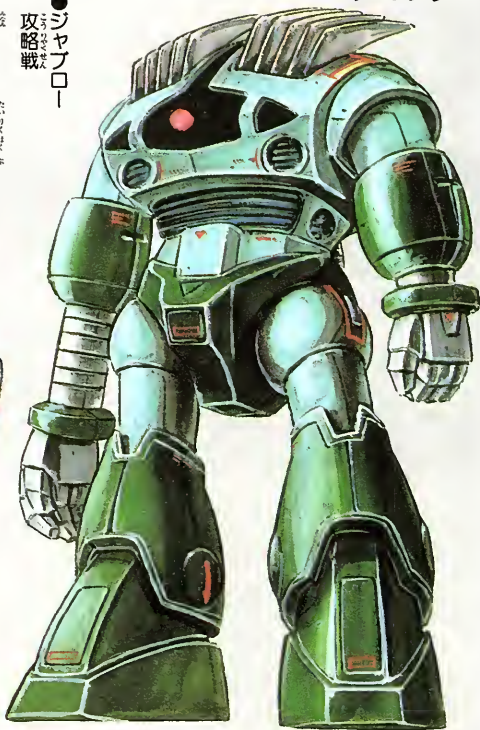


◀ロケット砲やビーム兵器などは、
もっていない。

ゾゴック

●ジャブロー
攻略戦

南アメリカ大陸北部にあるジャブローは、連邦軍の総司令部であり、最大の工場でもある。だが、正確な場所は公表さ



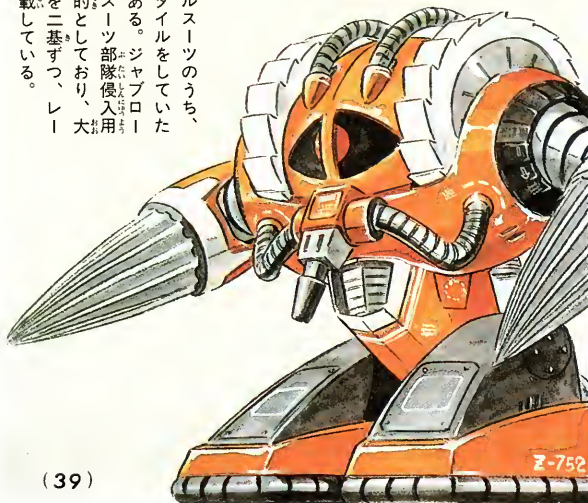
イー・エム・エス

EMS—05

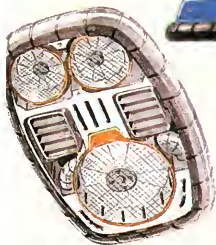
アッグ

れておらず、大部分の設備は地下深くの空洞にあるので、地上からの攻撃は不可能であった。そこでジオン軍は、ジャブロー攻略戦用の特務モビルスーツを開発したうえで攻撃を開始する予定であった。だが、実際の攻撃は、ホワイトベースを追跡していたシャア大佐の部隊が中心になっておこなわれ、これら特務モビルスーツが参戦するチャンスはなかった。

四種類の特務モビルスーツのうち、もっともかわったスタイルをしていたのが、このアッグである。ジャブロー攻略戦では、モビルスーツ部隊侵入用のトンネル掘削を目的としており、大型ドリルとカッターを二基ずつ、レーザートーチを一基搭載している。



●特務モビルスーツは、ジュアッグ、アッグガイ、ゾゴック、アッグの4機種で1チームを構成する予定であった。



▲アッグのホバークラフトユニットは、1基あたり3個のファンと2個のパワーサプライからなる。

EMS-05アッグ武装型

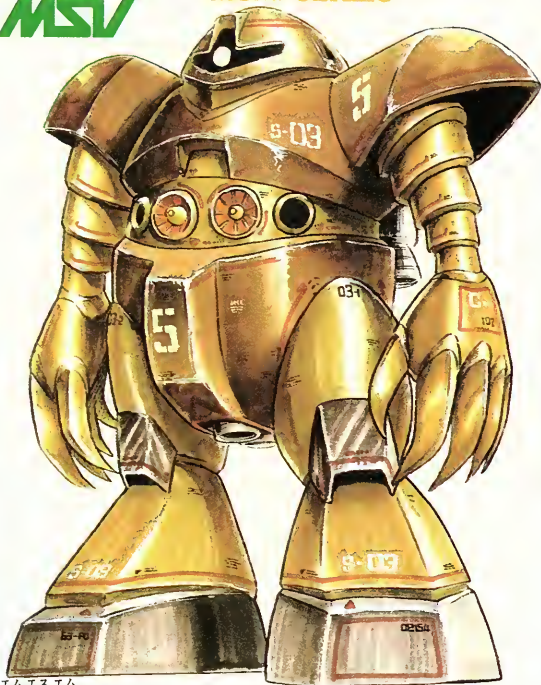
アッグの移動には二基のホバークラフトユニットを使用し、他のモビルスーツにみられるような歩行用脚部ユニットはもっていない。

固定武装は搭載されておらず、戦闘能力はほとんどないが、一部の機体にはオプションで、四連装ミサイルポッドを二ないし三基装備したものもあったようだ。だが、武装したとはいえず、その戦力は自衛用としても不十分なものだったと思われる。

●モビルスーツバリエーション

MSM SERIES

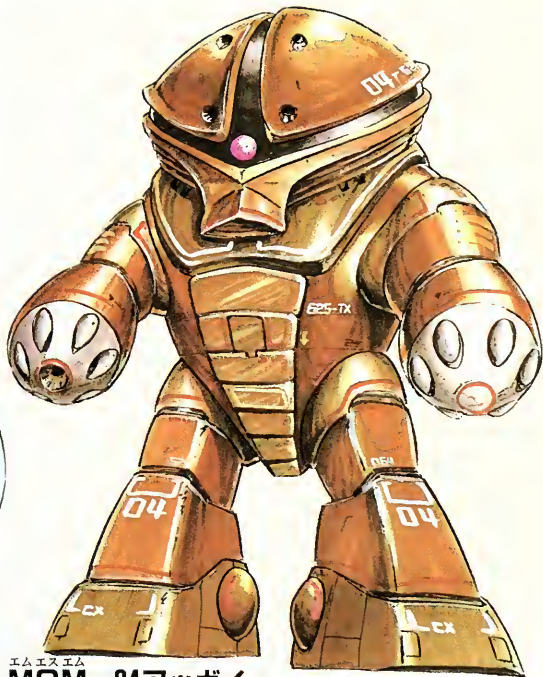
MSV



エム エス エム

MSM-03ゴッグ

第1期水陸両用モビルスーツとして開発されたゴッグは、その水冷式反応炉により、長時間の単独行動が可能である。武器としてメガ粒子砲をもち、沿岸基地と潜水艦隊に配備されていた。



エム エス エム

MSM-04アッガイ

エム エス エム

MSMシリーズ中、もっともザクにちかい運用うんようをされたのが、この
 MSM-04アッガイである。ザクタイプの反応炉はんのうろを改良したものを搭
 載さいし、コクピットを複座ふくざにしたことから、実戦部隊じつせんぶたいのほか、訓練部隊くんれんぶたい
 でも使用しようされていた。

●モビルスーツバリエーション

MSV MSM SERIES

エム エス エム

MSM-07

ズゴック

本来はMSM-04となるはずだったが、ゴッグの実戦データにもとづく設計改良をうけたため、完成がおくれ

た。だが、そのために性能は向上し、本機により水陸両用モビルスーツは完成の域にたつした。

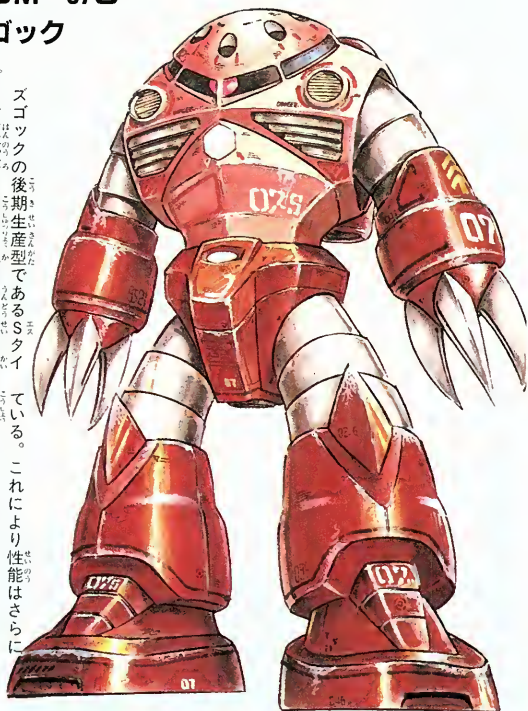


エム エス エム
MSM—07S

ズゴック

ズゴックの後期生産型であるSタイプは、反応炉の高出力化や運動性の改善、装甲板の軽量化・強化がはかられ

向上し、パイロットによつてはザクラス以上の戦果をあげたものもある。



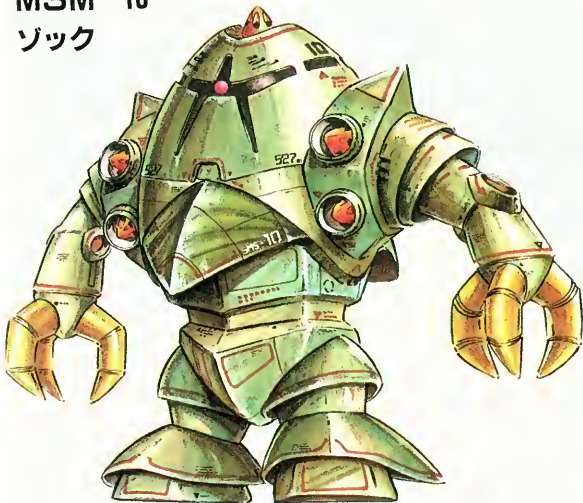
●モビルスーツバリエーション

MSV MSM SERIES

エム エス エム

MSM-10

ゾック



水陸両用モビルスーツのなかで、もっとも異様なスタイルを
していたゾックは、その重装甲により、局地戦用移動メガ粒子
砲座とよぶのがふさわしいものだった。これは、兵器開発の構想
がモビルスーツからモビルアーマーに移行する過渡期につくら
れたことによる。

armor SERIES

モビル
アーマー



エム エーエックス
MAX-03
アッザム

月基地グラナダに配備されたG87ルナタンクを、地球上での使用にたえるように改修したのがMAX-03アッザムである。これが実用モビルアーマーの第1号機種であり、原点でもある。もっとも、以後に開発されたモビルアーマーにくらべれば、移動砲座のようなもので、2機が試作されただけだった。

MSV

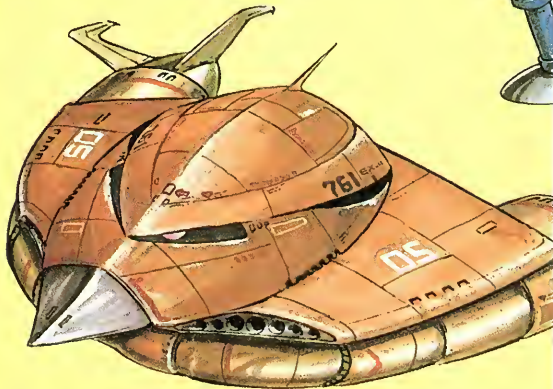
Mobile A

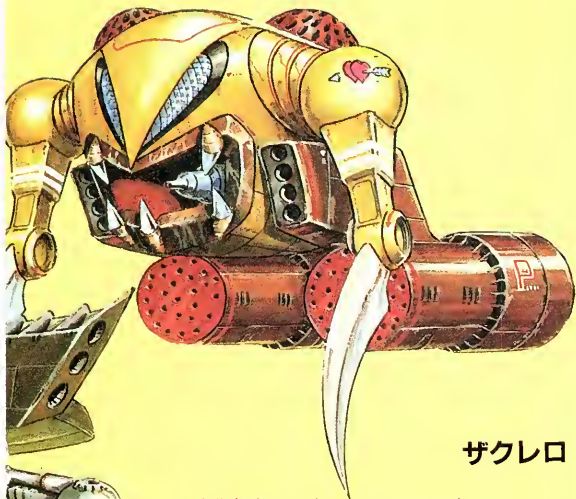
エム エー エヌ

MAN-07

グラブロ

水中戦用のモビルアーマーは、水陸両用モビル
 スーツと並行して開発がすすめられていた。そのな
 かでグラブロは、実戦に参加できた唯一の機種で
 あった。機体は小型潜水艦なみでありながら、航続
 距離は中型潜水艦をしのぎ、戦力では大型艦艇にな
 らんだ。3機試作され、すべて実戦参加し、水陸両
 用モビルスーツの支援や対艦攻撃に活躍した。量産
 計画では、艦首にメガ粒子砲搭載の予定であった。





ザクレロ

設計開始は、MA-05ビグロやMAN-07グ
 ブロなどに先行していたが、開発メーカーのふて
 ぎわによるエンジンの出力不足が判明し、けっ
 きよく不採用となった。制式ナンバーもあたえら
 れず、計画は中止された。ただし、完成していた
 機体は、武器などのテストベースとして使用され
 ていた。

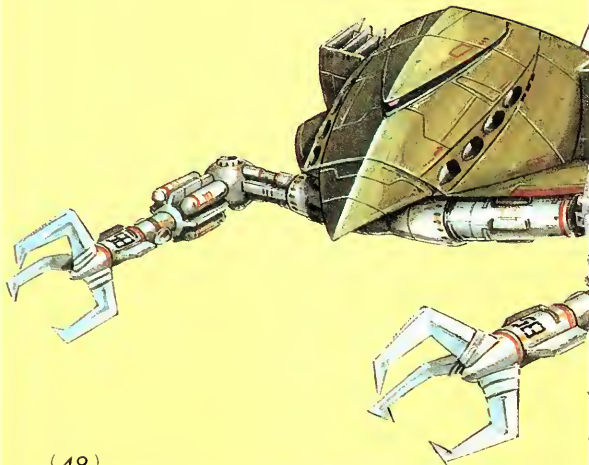
MSV MA SERIES

エム エー

MA-05

ビグロ

在来型宇宙ポッドタイプの兵器プランは、第1次モビルスーツ設計提案要請時に提出されてはいた。長いあいだわすれられていたが、モビルアーマー構想導入により注目をあつめ、ビグロとなって完成した。武器として、メガ粒子砲とミサイルランチャーをもつ。





エム エー

MA-08

ビグ＝ザム

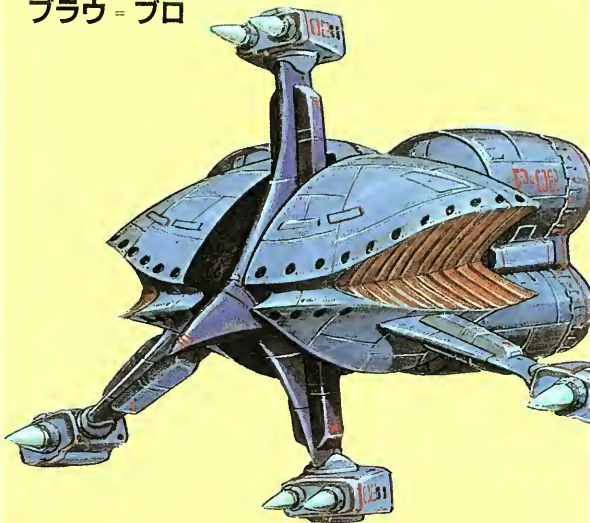
エム
エー
MA-08 ビグ＝ザムは、攻撃力重視
のコンセプトが末端拡大化した産物であ
る。今次大戦に登場した戦術兵器として
は、おそらく最大かつ最強であっただろ
うと思われる。欠点は、戦闘時間が十五
分前後と短すぎたことだ。

MSV MA SERIES

エム エー エヌ

MAN—03

ブラウ = プロ



このブラウ = プロは、ニュータイプのパイロットにむけて実験的につくられたモビルアーマーである。機体は大型の突撃艇ぐらいで、5 個のブロックに分離できる。6 門のメガ粒子砲をもち、有線式のサイコミュで制御する。

MA SERIES

エム エー エヌ

MAN-08

エルメス



エルメスは、ニュータイプ用モビル
アーモアの究極といえる。機体にメガ
粒子砲を二門装備するほか、サイコ
ミュシステムでコントロールされる無
人攻撃ポッドを十基もつ。このポッド
はビットとよばれ、推進エンジンにモ
ノアイとビーム砲をとりつけた構
造で、制御は無線サイコミュシス
テムによる。本機自体のコント
ロールもサイコミュシステムによ
りおこなわれるので、モビルス
ーツ以上の高機動力を発揮する。

MSV

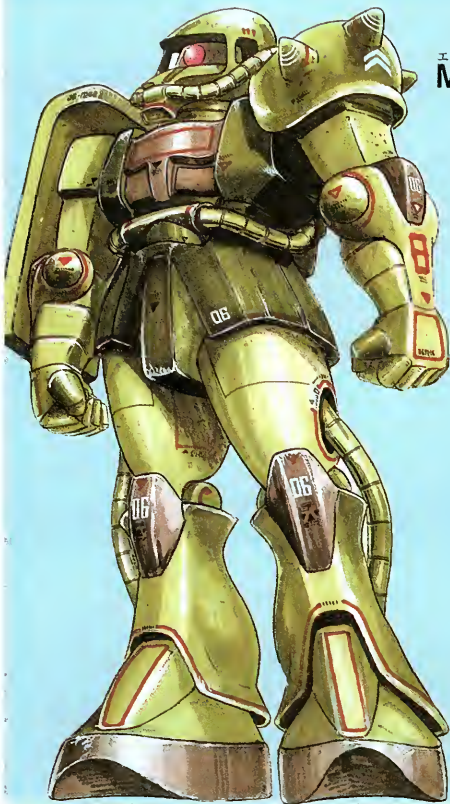
エム エス エー
MS-05A

ザク

ジオン
軍初の実戦
型モビルスーツで
ある。人間の形を
採用することによっ
て、状況におうじて各種の武器をもち

かえることができるほか、戦闘以外
の一般作業をすることができるよう
になっている。MS-05には、この
Aタイプのほかに、後期生産型のB
タイプがある。





エム エス エフ
MS—06F
ツ—
ザクII

一般にモビルスーツといったときには、このMS—06FザクIIをさしていることが多い。それほど有名、かつ大量に使用された機種である。また、

ジオン軍の開発したすべてのモビルスーツの原点であり、単一機種での最多生産数の記録をつくったことでも知られている。

MSV

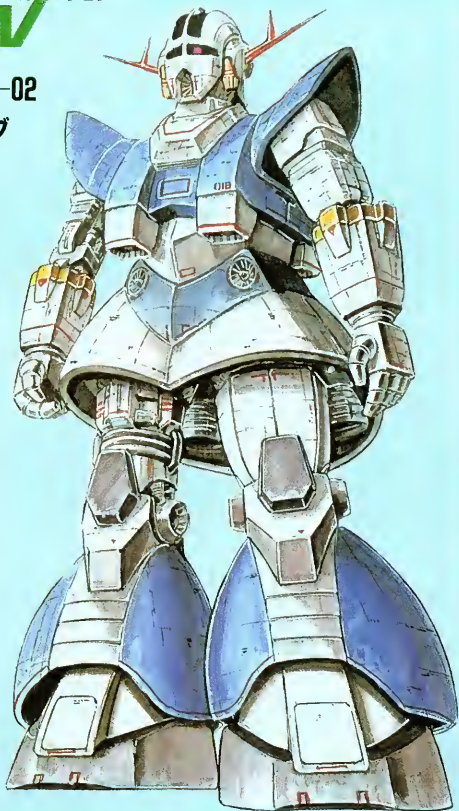
エムエスエヌ

MSN-02

ジオング

ジオン軍が最後に開発したのが、このMSN-02ジオングで、究極のモビルスーツとよばれている。有線サイ

コムシシステムを搭載し、ザクの二倍ほどの機体には、戦艦クラスのビーム砲を十三門そなえている。



MSV

EMBLEM *Collection*

エンブレム
コレクション



ウイングレディ

中国北部から北部ヨーロッパへ侵攻した部隊で使用されたエンブレム。のちに、フランス南部でも確認されている。

MSV EMBLEM Collection



◀グフレディ

とうなん かつやく
東南アジアで活躍した
サイラス=ロック中尉の
しょう
使用したパーソナルエン
ブレム。



グリーンサイレン▶

みなみたいせいよう せんすいかんたい
南大西洋の潜水艦隊「グリー
ンサイレン」に搭載されたモビ
ルスーツにつけられたマーク。



Pretty Bomb!

チャイナレディ

東部アジアの飛行部隊に
みられたマークで、のちに
地上モビルスーツ部隊での
使用が確認されている。

シーサーペント

北大西洋の潜水艦隊のモ
ビルスーツに使用された部隊
マーク。



MSV EMBLEM Collection

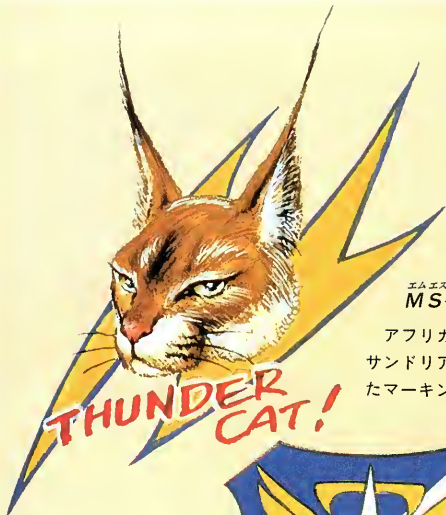
スリー ナーガIII

別名「赤いシャチ」
とよばれる、太平洋の
潜水艦隊で使用された
マーク。



エム エス シー MS-14C

エース部隊に所属
した機体にみられた
マーク。もとは、ア＝
バオア＝クーの防空
戦隊で使用されてい
たものである。



エムエス
MS-07

アフリカ戦線のアレキ
サンドリア基地でみられ
たマーキング。

THUNDER
CAT!

だい せんじゆつ
第4戦術モビ
ルスーツ部隊

キャリフォルニア
ベース所属のガウ攻
撃空母に使用された
マーク。作業用ザク
への使用例もある。



MSV EMBLEM Collection

エム エス
MS-09

きた せん せん いっ
北アメリカ戦線唯一のド
ム部隊である、「ブルーポー
ン」のマーク。



エム エス
MS-09

あ たいりく
インド亜大陸にいた、「サー
ベルタイガー」部隊のマーキ
ング。



だい き こうちゅうたい
第29機甲中隊

なん ぶ つう
フランス南部の、通
しやう ちゆうたい
称「ブリッツ」中隊で
しやう
使用されたマーク。



Mobile Suit Variation

3 Dimension Models

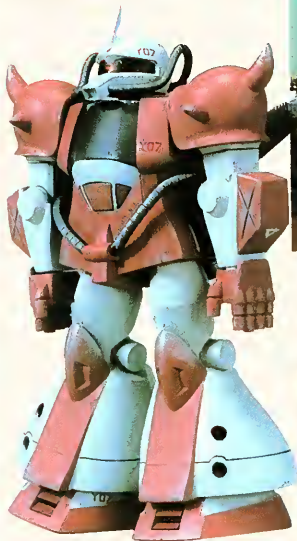


MS—06M
ZAKU MARINE TYPE



MS—06E—3
ZAKU RECONNAISSANCE
TYPE

MSV 3D Models



MS-07H
GOUF FLYING TEST
TYPE

MS-07B
GOUF CUSTOM
TYPE



MS-07C-5



YMS-08A



GOUF
LADY

(64)

MSV 3D Models

YMS-09
PROTOTYPE DOM



YMS-09D
DOM TROPICAL TEST TYPE



●モビルスーツバリエーション

MSV 3D Models

MS-14A
GELGOOG





MOBILESUIT VARIATION

TECHNICAL HANDBOOK

もくじ

モビルスーツ開発史 ^{かい はつ し}	68・106
MS-05A ^{エー}	53
MS-06F ^{エフ}	54
MS-07シリーズ.....	4・76
YMS-08A ^{エー}	11・88
MS-09シリーズ.....	14・90
MS-14シリーズ.....	24・98
MS-15.....	32・104
MSN-02.....	55
MSMシリーズ.....	33・108

モビルアーマー開発史 ^{かい はつ し}	129
モビルアーマーシリーズ.....	46・130
モビルスーツ イン アクション.....	12・18・28・160
エンブレムコレクション.....	56
MSV 3Dモデルズ ^{ダイ}	62
ジオン公国独立戦争史 ^{こく ぼく りつ せん せい}	154
ジオン公国軍軍人名鑑 ^{こく ぐん ぐん じん めい かん}	173

モビルスーツ開発史

1

●陸戦用モビルスーツ

の流れ

陸戦用モビルスーツは当初、空間戦用のMS-106FザクIIを転用すれば十分だと

思われていた。だが、地球では、重量

が約七十五トンにもおよぶFタイプのザクは、思うよ

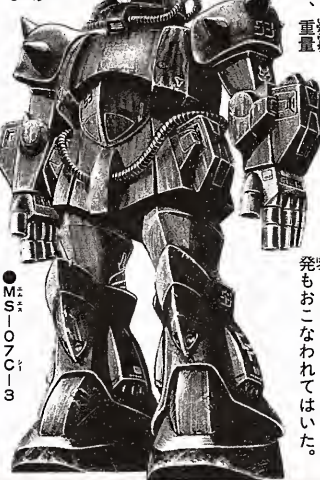
うに行動できなかった。それに、地球においては、地形や

気象条件がコロニー内

部ほど安定していなかつ

た。そこで、ジオン軍の

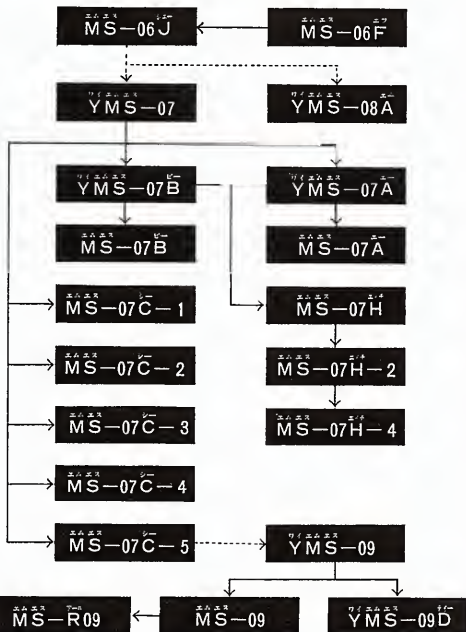
とった最初の対応策は、Fタイプから地上では必要のない空間戦用装備をとりぞいたか



●MS-07C-1

6Jの開発であった。Jタイプは第一次降下戦直前に完成し、テストをかねて地球に降下しているが、本格的に前線に投入されたのは第二次降下戦以後である。もちろん、他方で新型陸戦用モビルスーツの開発もおこなわれてはいた。

●陸戦用モビルスーツの流れ●



(^{くうかんせんよう}空間戦用モビルスーツ)



●MS-07B マジンガー大佐機

MS-07グフのカスタムタイプで、Bタイプから改修されている。戦闘部隊以外でのカスタムタイプのモビルスーツはめずらしい。

地球進攻戦は決定から開始までの時間が短かったため、第一次、第二次降下にはまにあわなかったが、第三次降下部隊には新型陸戦用モビルスーツMS-07グフが配備されはじめた。

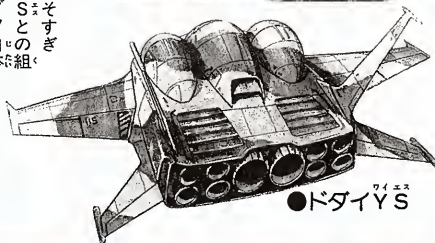
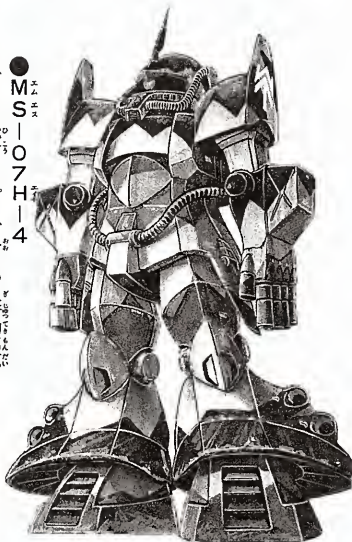
MS-07グフは、完全に陸戦用モビルスーツとして開発されたが、局地戦がす

むにつれて、固定武装しかもたないために戦場の状況に対応しきれないことがわかった。

そこで、つぎに登場したのが、Cシリーズとよばれるグフのバリエーションである。

これは固定武装のバリエーションを多くし、状況に応じた機種をその戦場におくると

●MS-07H-4
グフの飛行タイプは、多くの技術的問題を解決できず、けっきょく、失敗におわった。



●ドダイYS

✓いう運用であった。
ザクにしろグフにしろ、重力下における展開には大きな問題をかかえていた。一般にモビルスーツの移動は、歩行によるか、車両を使用していた。だが、この方法では

展開速度がおそすぎた。ドダイYSとの組み合わせや、グフ自体の飛行プランなどもあったが、MS-09ドムの完成をみるまでは、最終的に解決しえなかった。なお、ドムの部隊配備は、大戦も後期にはいつてからである。

●空間戦用モビルスーツ

の流れ

空間戦用モビルスーツは陸戦用モビルスーツとことなり、ながらくMS-06ザクⅡが主力となっていた。もともと、バリエーションとして、C、F、S、R-1、R-1Aなどの各タイプがあった。

大戦も中期にはいると連邦軍の戦力も整備され、RXタイプのモビルスーツの情報

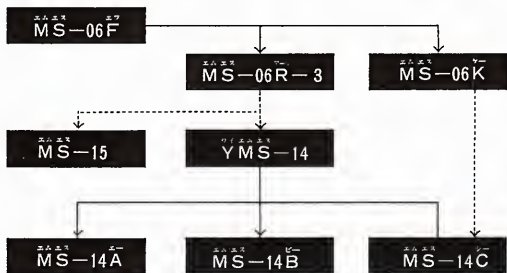
がはいってきたこともあり、ジオン軍でも次期主力空間戦用モビルスーツの開発が決定した。このとき軍に提出されたプランは、

ザクの最新モデルR-2タイプ、ドムの空間戦仕様様のR-09、それと新設計のMS-15とMS-11（のちのMS-14）であった。

本命はMS-14ゲルググであったらしく、計画当初から他のプランは当面のつなぎとしてのものではなかったといわれている。

事実、MS-14ゲルググの開発が終了へ

●空間戦用モビルスーツの流れ



MSV

✓した段階で、各地のモビルスーツの生産設備はMS-14にきりかえられている。ゲルググの量産先行型がつくられはじめたのは宇宙世紀七九年十月にはいつてからだ、が、ビーム兵器の生産ラインが動き出したのは同年十一月下旬だった。当時のジオン軍は、ゲルググの陸上戦への投入も予定していた

らしく、腕部に補助推進機としてのジェットエンジンが装備されていた。そして、最後に登場したモビルスーツMS-102 ジオングは、有線式サイコミュシステムを搭載した究極のモビルスーツとよべるもので、それまでのジオン軍のモビルスーツ技術が、すべて投入されていた。



●MS-14C

ビームキャノンパックを装備し、支援重装備型としてエース部隊に配備された。

●Cランドセル



各種装備の換装は、MS-106ザクⅡでも考えられてはいたが、ゲルググのように簡易化はされず、機体のマイナーチェンジをおこなうか、たんに武器をもちかえる程度であった。

終戦の約一か月まえに実戦配備されたMS-14ゲルググには、使用目的のことなる二種類のランドセルが用意されていた。これは、作戦にあわせてランドセルを換装することにより、汎用性を高めることをねらったものである。

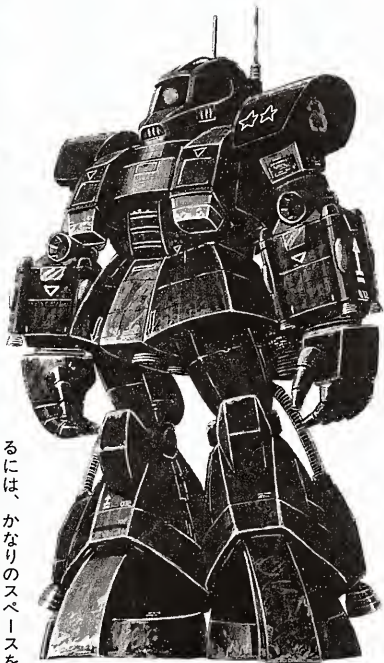
●Bランドセル



MSV

以前より導入が提言されていたサイコ
ミュシステムは、MS-06Zにおいて、
はじめてモビルスーツへ搭載された。以
後、MSN-001をへて、MSN-002ジ
オングで、やっと実戦タイプとして完成を
みた。だが、サイコミュシステムを搭載す

るには、かなりのスペースを必要とするた
め、機体が大型になりすぎた。また、パイ
ロット個々の資質にあわせてつくるため、
大量生産にはむかなかった。さらに、パイ
ロットがニュータイプであることが必要条
件であったため、すぐに主力モビルスー
ツになれるものではなかった。

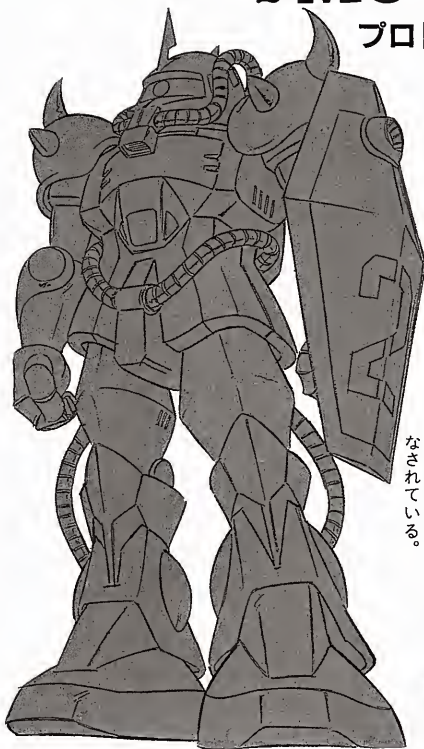


●MS-06Z

MS-06Fをもとに、サイコミュシステム試験機として製作された。

YMS-07

プロトタイプ グフ

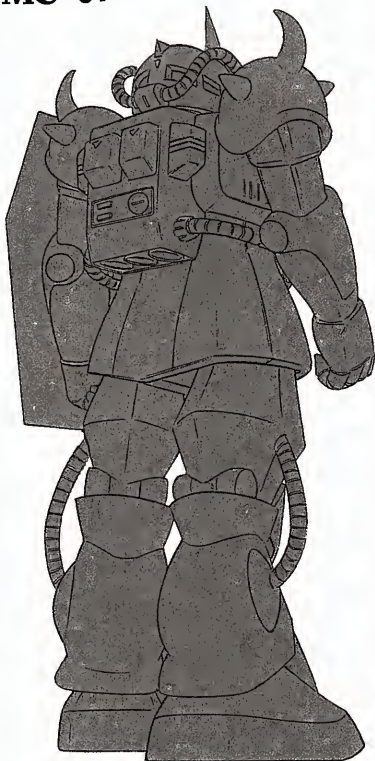


ジオン軍は、地上戦用に、MS-06Fを改修したJタイプを生産したが、同時に白兵戦を主目的としたモビルスーツとして、MS-07とMS-

08を競作のかたちで開発していた。試作機のYMS-07は、Jタイプのザク以上にラジエーターのパワーアップをはかったほか、徹底した軽量化がなされている。

MSV YMS-07

脚部には格闘戦用に補助バーニヤが装備され、軽量化されたとはいえ、装甲面でもザクをうわまわるものとなっている。また、試作三号機からは、軽量化によって生まれた胴体内のスペースをいかして五連装七十五ミリマシン

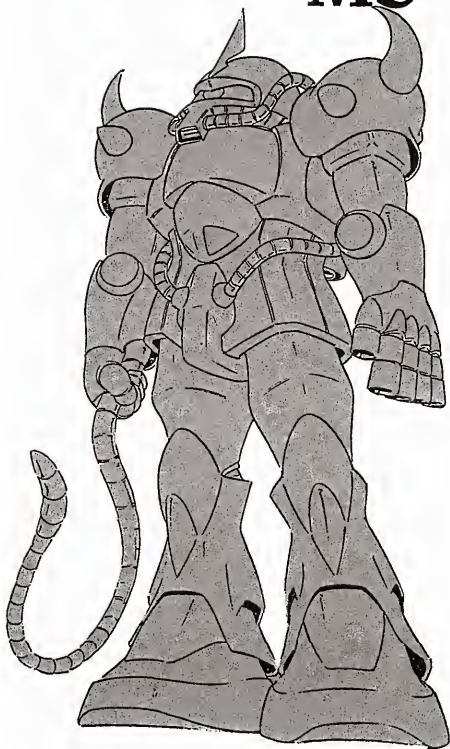


ガンを生蔵し、右腕にはヒートロッドとよばれる伸縮式の放熱むちが装備された。ついで外装の整理がおこなわれた。量産先行型YMS-07Bが製作されたあと、MS-07Bとして量産され、部隊配備がおこなわれた。

(77)

MS-07B

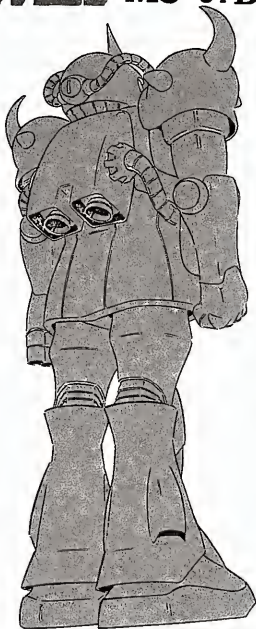
グフ



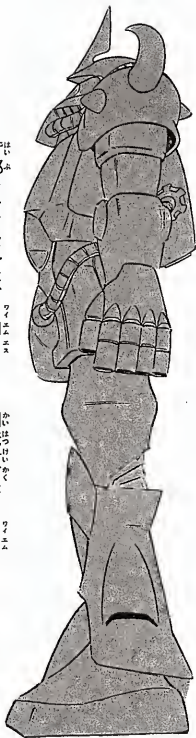
YMS-07 三号機を原点として量産化されたBタイプは、モビルスーツとしてはじめての固定武装を搭載した機種である。プロトタイプ開発段階で

軽量化と高性能化が両立し、固定武装化が可能になったのである。計画変更にもなう改修は順調にすすみ、MS-07Bの型式ナンバーがあたえられた。

MSV MS-07B

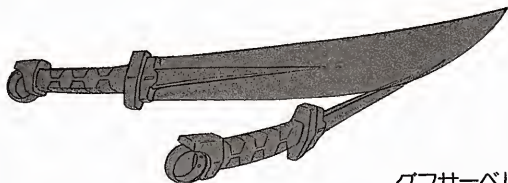


より、短距離ジャンプ飛行が可能となった。
 S-07計画に統合されたときに導入された。これにより、
 背部ランドセルは、YMS-08開発計画が、YMS



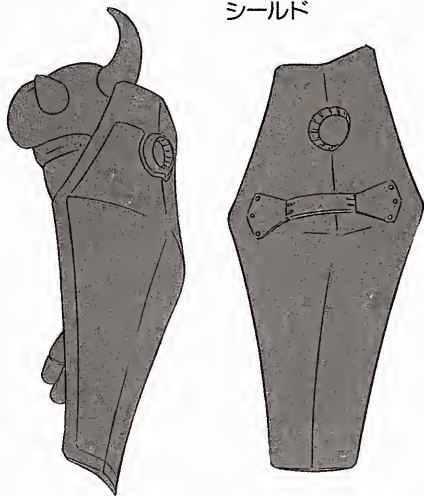
グフの量産には、月面基地グラナダと北
 米カリフォルニアベースにあったMS-
 06Jの生産ラインがそのまま転用され、J
 タイプの生産は中止となった。

●グフの武器^{ぶき}



グフサーベル

シールド



グフは、Aタイプ^{エイ}をのぞいて、武装^{ぶそう}はすべて固定式^{こていしき}なので、ザクのような携帯^{けいたい}火器^{かき}はない。オブシヨンの携帯^{けいたい}武器^{ぶき}として、グフサーベルとよばれるヒートサーベルがある。

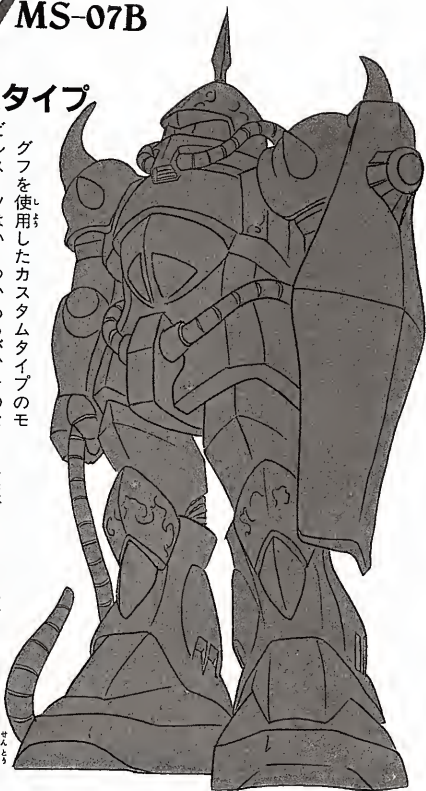
MSV MS-07B

グフ

カスタムタイプ

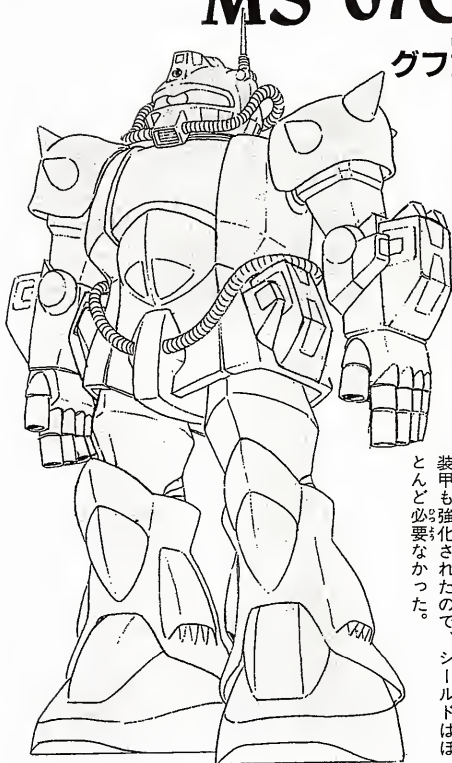
グフを使用したカスタムタイプのモビルスーツはいくつかあるが、そのなかで、もっとも有名なのがマークベダ佐の乗機である。Bタイプをベースにしたもので、頭部にスピアヘッド状の装飾をもち、機体各所にエンブレーブ

をほどこしたものだ。これは戦闘用モビルスーツというよりは、外観の異様さから、一種のステータスシンボルとしての意味のほうが大きかったといわれている。



MS-07C-3

じゅうそうがた
グフ重装型



C-3タイプのグフは、固定武装のうち、火力を重点的に強化したタイプである。右腕のヒートロッドは廃止さ

れ、かわりに、両腕に五連装八十五ミリマシンガンが一基ずつ装備された。腰には予備マガジンがそなえられた。装甲も強化されたので、シールドはほとんど必要なかった。

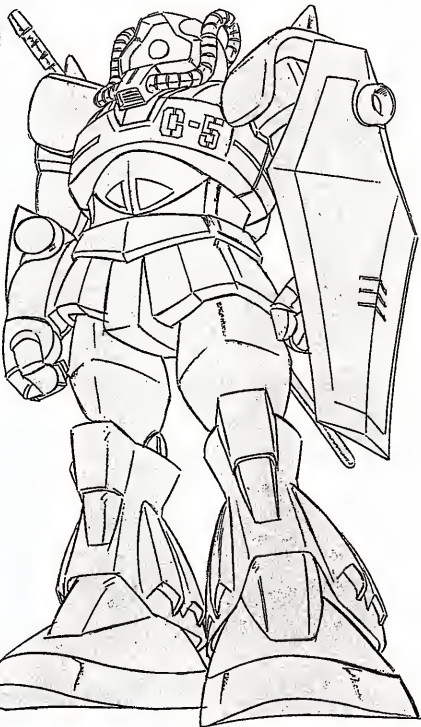
MSV

MS-07C-5

グフ

機験実作試

機験実作試
Cタイプとよばれる一連のマイナー
チェンジ型のグフのうちでも、C-5
タイプは異色であった。両腕の固定武
装を廃し、新たにヒートサーベルが装
備され、モノアイが十文字形に換装さ



れた。

じつは、この機は、つぎに開発され
るYMS-09のためのデータ収集用
テスト機で、一機しか製作されず、実
戦にも参加していない。

MS-07C-5



このC-5タイプによっておこなわれた実験のうち、もっとも重要だったのが新型推進エンジンをもちいた高速移動と、ヒートサーベルのテストである。そのため、背部ランドセルのバーニヤを可能な限り強化し、くわえて

脚部に補助推進エンジンを装備している。くわしいテストデータはのこっていないが、いちおうの成功はみたらしい。なお、ヒートサーベルは、この時点で、すでに完成していた。

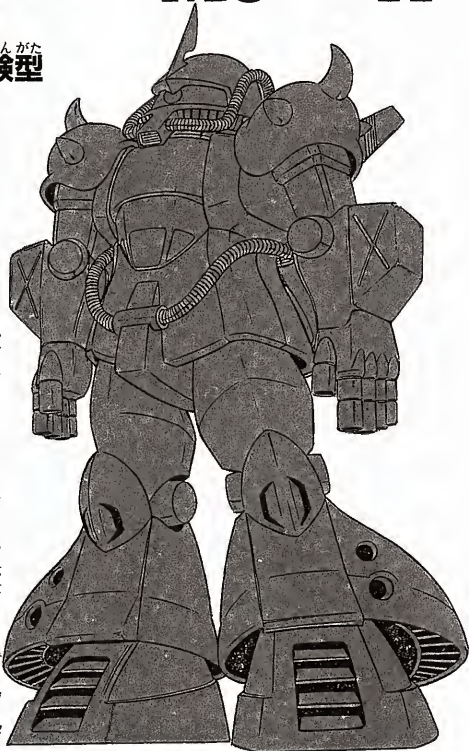
MSV

MS-07H

グフ

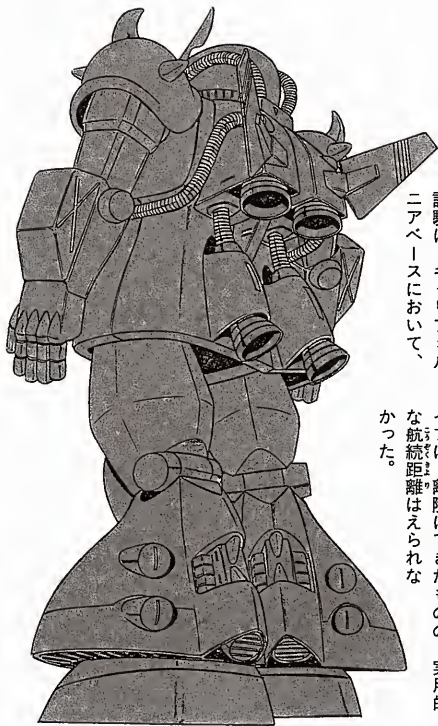
ひこうしけんがた
飛行試験型

地球上でのモビルスーツの移動力の低さは、地球侵攻作戦時にあきらかになっていました。この対策として、グフの飛行可能化プランがたてられた。



テスト機は、YMS-07A三機とYMS-07B一機がサイド3で改修され、MS-07Hのナンバーがあたえられた。

MS-07H



Hタイプは、バーニヤの強化と、熱核エンジンを脚部に集中させることによって推力をえるものであった。飛行試験は、キャリフォルニアベースにおいて、

ビリー・ウオン・ダイク大尉の指揮のもと、四週間に四十八回おこなわれた。だが、総重量八十トンにもおよぶHタイプは、離陸はできたものの、実用的な航続距離はえられなかった。

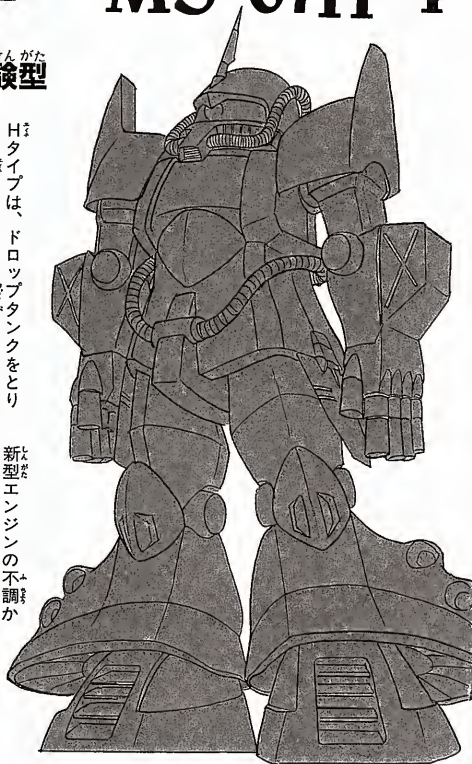
MSV

MS-07H-4

グフ

飛行試験型

Hタイプは、ドロップタンクをとりつけたH-2をへて、脚部エンジンを新型に換装し、腰に補助ロケットを追加し、装甲を整形したH-4タイプへと発展した。しかし、H-4タイプは



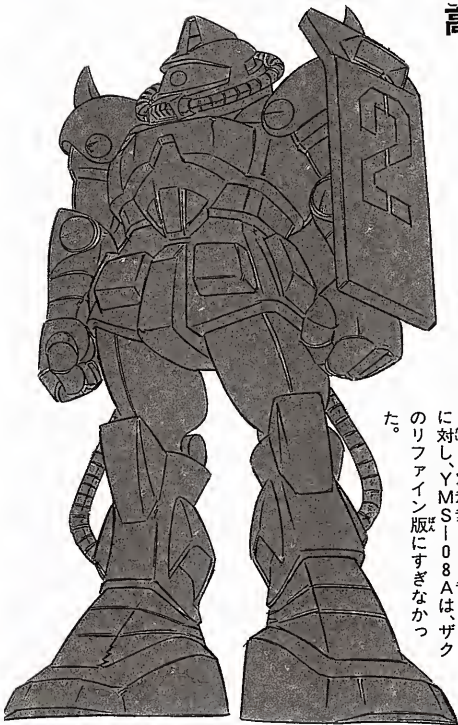
新型エンジンの不調から、パイロットのフランク・ベルナル少尉をのせたまま空中爆発をおこしてしまった。この事故によって、MS-07の飛行計画は中止された。

YMS-08A

こうきどうがた
高機動型
しきくき
試作機

MS-06Jに限界を感じたジオン軍では、機動性を向上させた新型陸戦用モビルスーツの開発にのりだした。そのひとつがMS-07計画だったわ

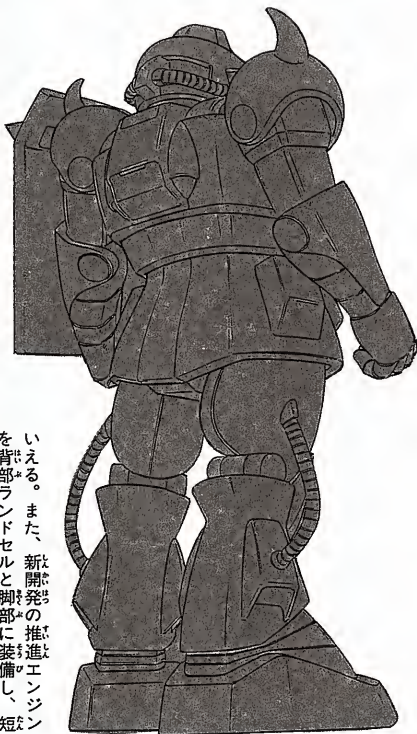
けど、それと並行してすすめられていたMS-08計画もあった。そして、試作機YMS-07が陸戦用モビルスーツのあるべきすがたをしめたのに対し、YMS-08Aは、ザクのリファイン版にすぎなかつた。



MSV YMS-08A

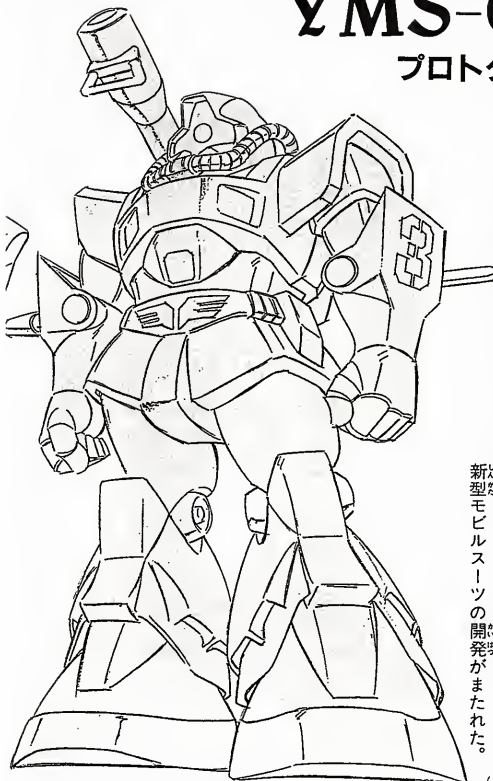
YMS-08Aの基本設計はFタイ
プのザクのものを流用し、ラジエタ
ーのパワーアップ、装甲の強化、ならび
に機体の軽量化がなされている。接近
戦やゲリラ戦を念頭においたつくりと

いえる。また、新開発の推進エンジ
ンを背部ランドセルと脚部に装備し、短
距離ジャンプ飛行が可能のように設計
されてはいたが、出力不足で十分な
ジャンプはできなかった。けっきよ
く、この計画はMS-07計画に統合
され、五機の生産にとどまっている。



YMS-09

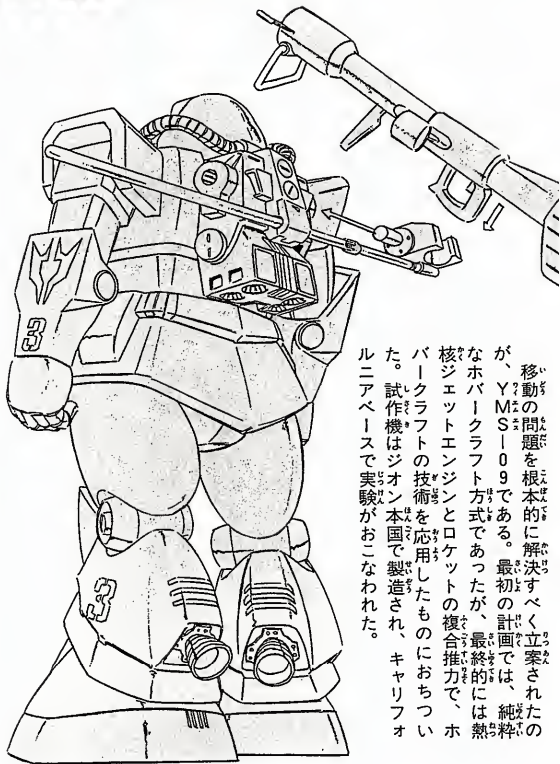
プロトタイプ ドム



モビルスーツの地上における移動力向上という問題にとりくんだジオン軍では、いく度かの失敗をかさねた結

果、ドアイYSをモビルスーツと組み合わせることになった。しかし、これはあくまでも一時的な解決にすぎず、新型モビルスーツの開発がまたれた。

MSV YMS-09



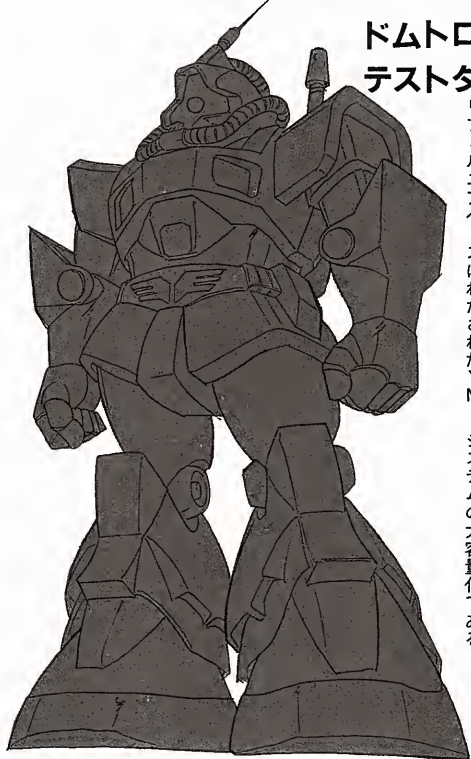
移動の問題を根本的に解決すべく立案されたのが、YMS-09である。最初の計画では、純粋なホバークラフト方式であったが、最終的には熱核ジェットエンジンとロケットの複合推力で、ホバークラフトの技術を応用したものにおちついた。試作機はジオン本国で製造され、キャリアフォルニアベースで実験がおこなわれた。

YMS-09D

ドムトロピカル テストタイプ

北アフリカ戦線の要請にこたえ、MS-09Dのドムの熱帯地仕様がつくられることになった。研究素材には、キャリフォルニアベースにわたされたYMS

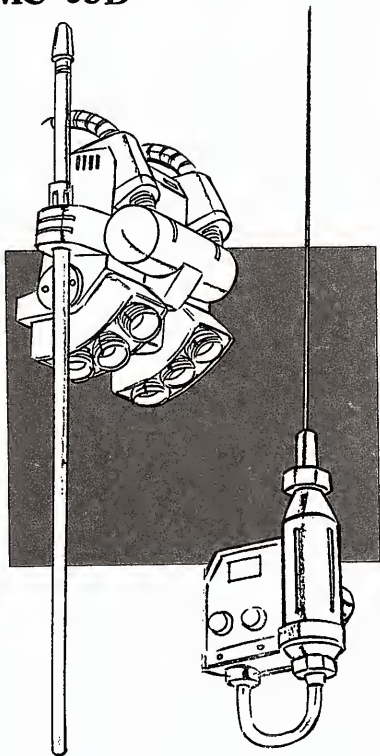
MS-09の二号機が使用された。主な改修点は、ドムにおいて機体に変化されたランドセルの再分離と、冷却システムの大容量化である。



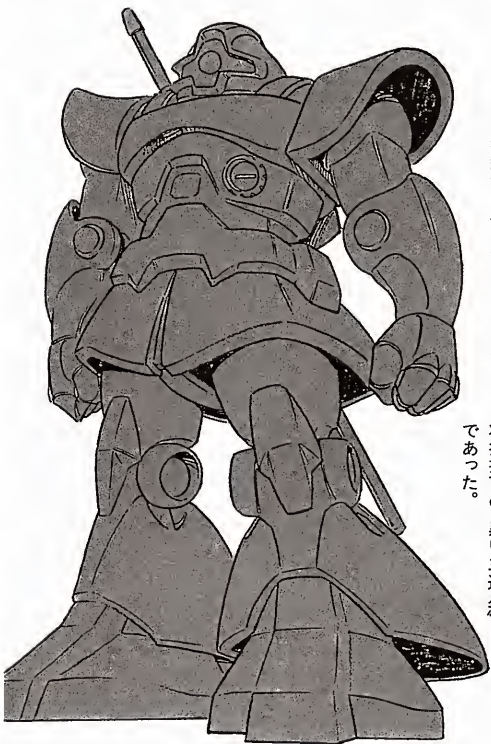
MSV YMS-09D

トロピカルテストタイプの頭部には、近距離通信機用のアンテナが取り付けられた。これも要望の多かったものだが、通信機自体の性能は、たいしたものではなかった。

試作機による実験は、オーバーヒートもなく、満足のいく結果であった。ただちに量産にむかったが、時すでにおそく、終戦まじかであったため、実戦に参加したのは、十数機ほどであった。なお、一般にDタイプとよばれているが、これは制式名ではない。



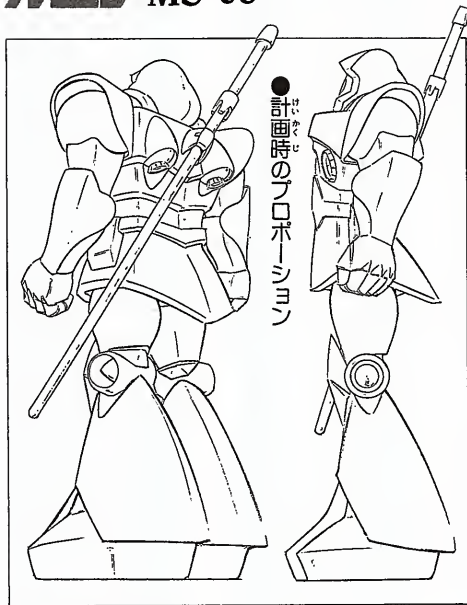
MS-09 ドム



YMS-09は、外部の形状に多少手なおしをうけたものの、ほぼプロトタイプおりのかたちで量産が開始された。型式ナンバーはMS-09で、

ドムと名づけられ、ユーラシア大陸中に初配備された。このとき、はじめてドムにのりこんだのが、キシリア少将指揮下の「黒い三連星」であった。

MSV MS-09



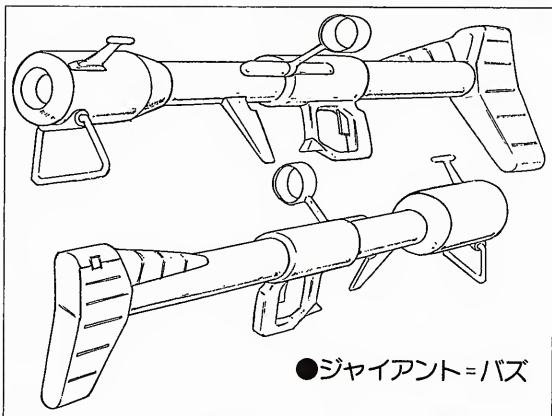
●計画時のプロポーション

計画時のMS-09ドムのデザインは、R-2タイプのザクくらいのボリュームしかなかった。だが、試作機を手なおしていくなかで、現在のプロポーションに修正されている。

●MS-R09リックドム

空間戦用モビルスーツ開発のおくれに対し、ジオン軍の
とった手段が、ドムの空間戦仕様だった。これがMS-R
09リックドムとよばれる機種である。

エム エス
●MS-09ドムの武器

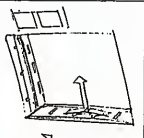
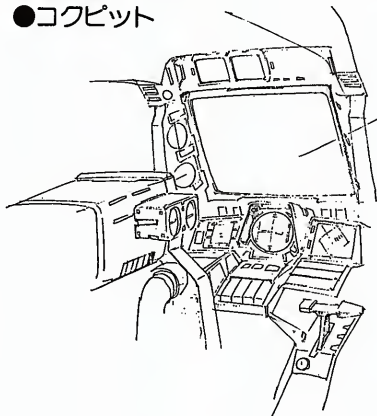


●ジャイアント=バズ

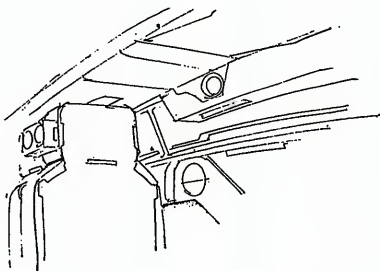
MS-09ドムの開発に並行して研究された武器に、三百六十ミリバズーカ砲がある。これは、それまで製作されたモビルスーツの携帯火器のうち、最大級のものである。試射実験はキャリフォルニアベース北部の試射場でおこなわれた。威力は、のちに開発されたMS-14用ビームライフルにおよばないものの、一撃で巡洋艦クラスの宇宙艦を大破させる威力をみせた。これ以外は、特別に開発された武器はない。このバズーカ砲は、ジオン軍の基本モビルスーツ規格にしたがつてつくられているので、腕部が固定武装でめられているか、クローになっているものをのぞき、あらゆる機種が使用できた。パイロットによっては、ザクにのりながら、ザクマシンガンよりこちらを愛用した例もある。ぎやくに、ドムも、ザクやグフの武器を使用したのだが、その例はみられないようだ。

MSV MS-09

●コクピット



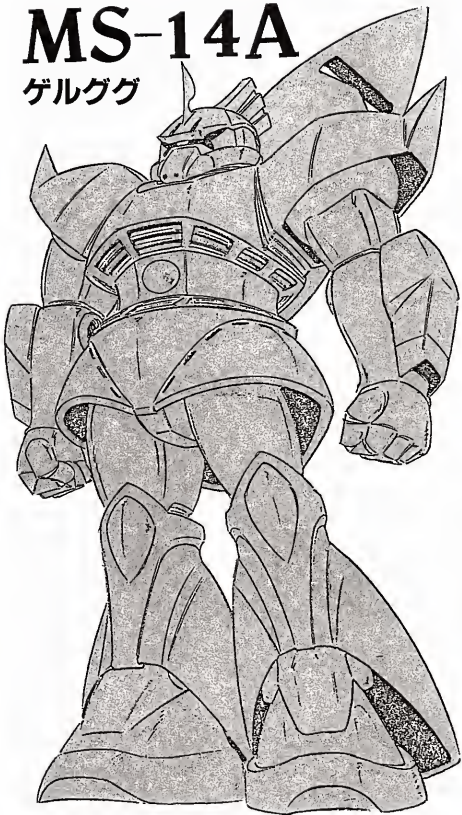
MS-09のコクピットは、MS-06ザクⅡよりあとのほとんどのモビルスーツに採用されている、ダイレクティオン方式とよばれる搭乗方法がとられている。これにより、前面装



甲の泣きどころであった搭乗ハッチが飛躍的に強化された。だが、一部のパイロット、とくに砂漠や湿地帯にいるものたちには、コンソールがよごれるという不評もあった。

MS-14A

ゲルググ



第二期主力モビルスーツ開発計画の
目的は、連邦軍のRXシリーズをうわ
まわる性能のモビルスーツをつくりだ
すことであった。プランとしては、M

S-106R-2、MS-R09、MS-
11、MS-15の四つがあった。ジオン
軍内部では、MS-11が本重視されて
いたが、その開発はじまったばかり

MSV

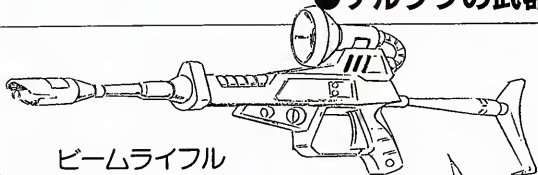
MS-14A

が採用されてい
合性能の高いMS-14は、その後、MS-14と名
称が変更され、量産先行型YMS-14
が二十五機製造された。このYMS-14



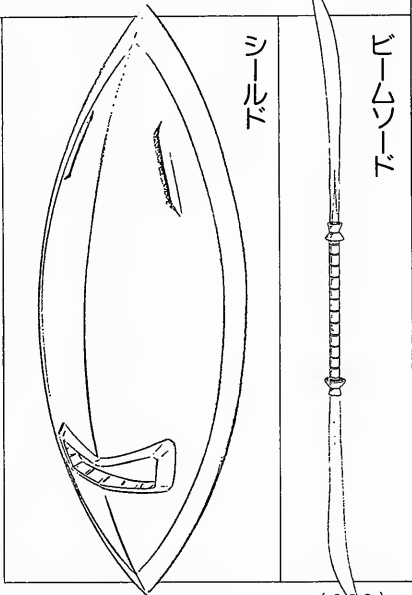
14は、試作機とよばれることもあるが、あくまでも量産先行型であり、真の試作機はMS-06R-3ザクⅢであると思われる。量産型MS-14の実戦配備は大戦末期であったため、高性能ながら、あげた戦果は小さい。

●ゲルググの武器^{ぶき}



ビームライフル

MS-14ゲルググの第一の特徴は、武器にある。ゲルググは、ジオン軍のモビルスーツ中、はじめてビーム兵器を標準装備としている（もっとも、ビーム兵器の開発は、機体の完成より三か月もおくれているが）。第二の特徴は、従来のランドセルを発展させた各種バックパックを分離したシステムとし、必要に応じて換装したことである。



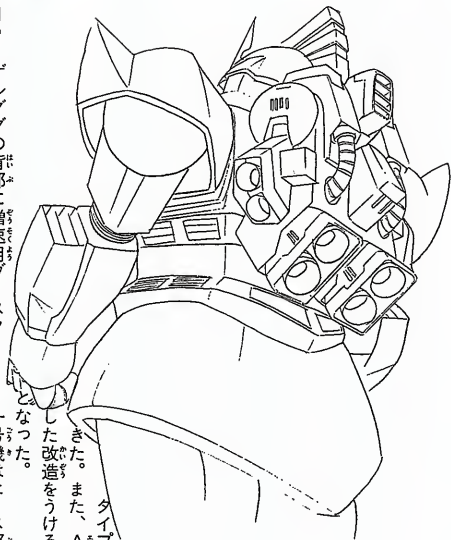
シールド

ビームソード

ゲルググ

こうきどうがた
高機動型

ゲルググの背部に増速用ブースターパックを装備した高機動型を、Bタイプとよぶ。このブースターパックはスイッチひとつでかんたんに着脱でき、ブースターをはずしたBタイプは、A



タイプと同様の運用ができた。また、Aタイプはちよつとした改造をうけることで、Bタイプとなった。
 一号機はエース部隊に配備されたYMS-14Bで、J-1ライデン少佐の乗機となったが、それ以外にもBタイプは十一機、エース部隊に配備されている。

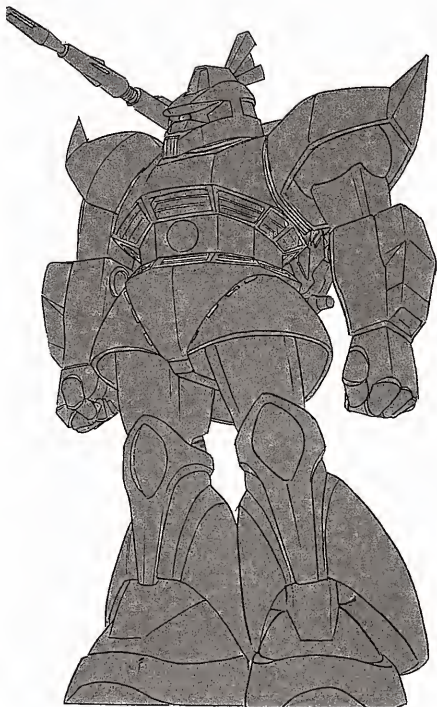
MS-14C

ゲルググ キャノン

MS-14の三番めのバージョンは、キャノンパックを搭載したCタイプである。機体そのものはAタイプとさほどかわりはなく、しいてあげれば、頭

部に補助カメラが装備されたぐらいである。

キャノンパックは、RA2タイプのビームキャノンと増速用ブースターへ



MSV MS-14C

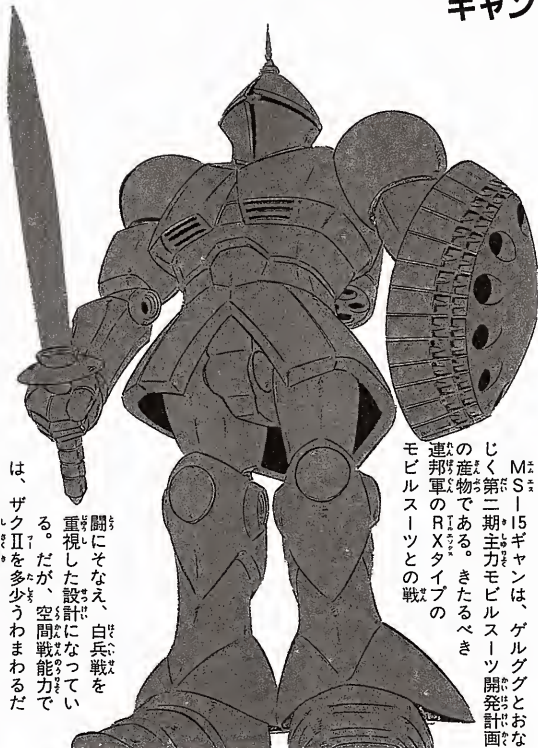
へからなっている。キャノン砲を通常火薬式ではなくビーム式にしたことで、ザクキャノンのように重量バランスや反動処理になやむことなく、三百六十ミリバズーカ砲を両手にもって出撃した機もあったくらいである。



性能は良好であったが、なにぶん終戦まぎわの配備であったため、実戦参加したCタイプは十五機にとどまった。生産されたCタイプのパーツは、百二十二機分もあったものの、組み立てられずにおわっている。Cタイプも、Bタイプ同様、Aタイプからかんたんに改造できた。

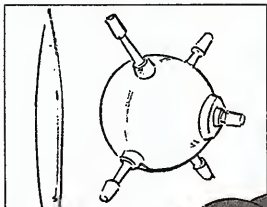
MS-15

ギャン

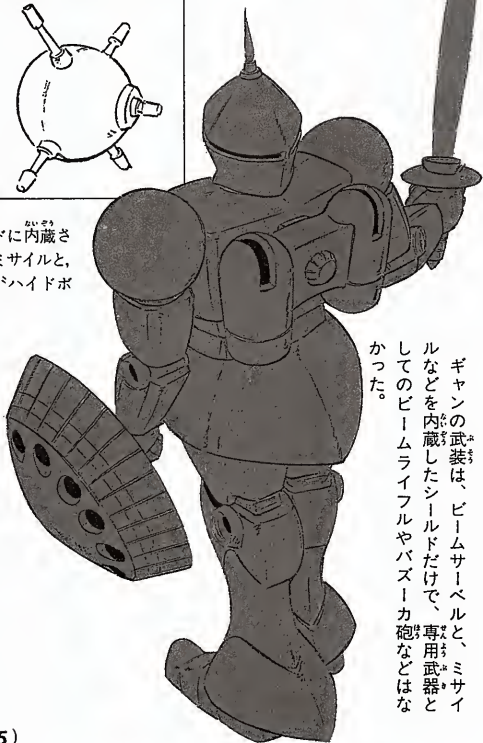


MS-15ギャンは、ゲルググとおなじく第二期主力モビルスーツ開発計画の産物である。きたるべき連邦軍のRXタイプのモビルスーツとの戦

闘にそなえ、白兵戦を重視した設計になっている。だが、空間戦能力では、ザクIIを多少うわまわるだけで、試作機におわっている。



▲シールドに内蔵された小型ミサイルと、宇宙機雷シールドボム。



ギャンの武装は、ビームサーベルと、ミサイルなどを内蔵したシールドだけで、専用武器としてのビームライフルやバズーカ砲などはなかった。

モビルスーツ開発史

かいはつし

2

●水陸両用モビルスーツ

水陸両用モビルスーツは、地球進攻作戦の決定をまつて、開発が着手された。ジオ軍の最初の考え方は、MS-06ザクⅡのバリエーションのひとつとして、水陸両用型を開発しようというものだった。計画は、MS-06Mザクマリンタイプとなつて実現したが、これは、とうてい実戦にたえうるものではなかった。

まったく新しい観点から水陸両用モビルスーツを開発することになり、これらにはMSMナンバーをあたえることになった。MS-06Mは、MSM-01と改称されて、新型水陸両用モビルスーツのためのデータ収集に使用された。

このデータがひととおりそろったあたり

で、第一期開発がスタートし、MSM-03ゴックを生みだしている。ゴックも、第二期に開発されたMSM-04アッガイやMSM-07ズゴックも、性能面で過大な要求をされなかったこともあり、順当な仕上がりを見せている。

また、水陸両用型の実戦配備は、なるべく同一機種による部隊編成をおこない、地上のモビルスーツ部隊よりも、物資の補給がしやすくなっていた。

●潜水艦隊の編成

水陸両用モビルスーツが効果的に運用できたのは、潜水艦隊が編成されたからである。地球に侵攻したジオ軍の潜水艦は、当初、単独行動による敵補給路の破壊とい



う、古くからある運用方法がとられていた。この潜水艦と水陸両用モビルスーツを組みあわせるという考えは、幸か不幸か、MSM-101の開発失敗から生まれた。水陸両用モビルスーツは、独立した部隊での上陸作戦を目的に開発されていたが、MSM-101の欠点があきらかになった時点で、別兵器による支援が決定された。こうして、潜水艦と水陸両用モビルスーツのコンビネーションができあがり、大いなる戦果をあげることができた。最初の計画にこだわり、両兵器を単独で運用したなら、効率のわるいままにおわったにちがいない。潜水艦隊は、大小あわせて六艦隊編成されていたが、艦の移動や特別編成がひんぱんにおこなわれており、この数は時期によって差があったといわれる。

なお、地球に降下したジオン軍の艦艇は数が少なく、捕獲した連邦軍の艦艇を改修して使用していた。

●特務モビルスーツ

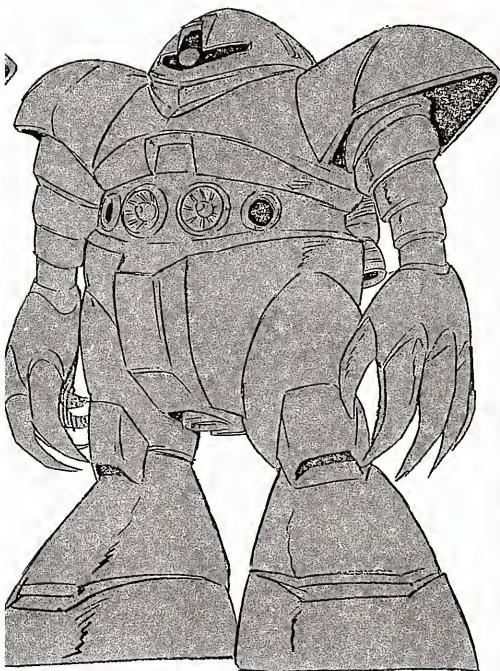
水陸両用モビルスーツの開発途上で誕生したのが、ジャブロー攻略用特務モビルスーツである。

ジャブローは地下基地であったため、通常の攻撃では効果がなく、大戦初期におこなわれたブリティッシュ作戦でも、ジャブローにコロニーを直撃させることができなかった。そこで、役割を明確にした、複数の機種により編成された部隊を、多方面から同時に侵入させる計画がたてられた。

作戦は、まず、アッグが侵入路をほりおこし、つづいてジュアッグが中距離攻撃をかける。それを援護として、アッグガイとゾゴックがジャブローに侵入し、白兵戦をしかけるといふものであった。きはつすぎる作戦のため、軍内部にも成功の確率を疑問視するむきもあったが、けっきょく、実行するチャンスを失ってしまった。

MSM-03

ゴック



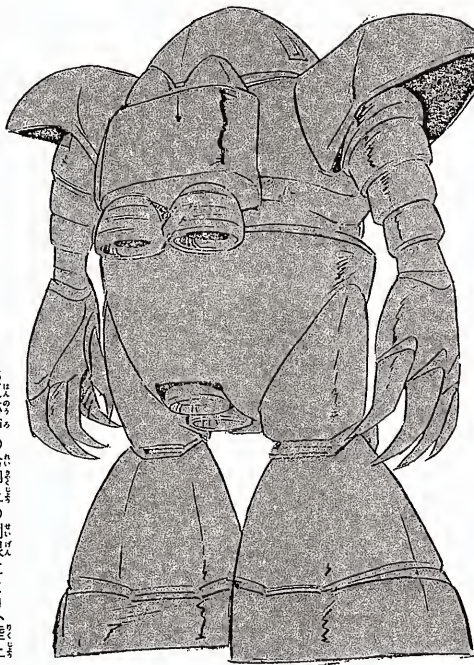
MSM-03ゴックは第一期水陸両用モビルスーツとして、MSM-02と競作のかたちで開発された。機体

は、水の抵抗が極力少なくなるよう設計されており、高出力反応炉の搭載とあいまって、最高速度七十ノットへ

MSV MSM-03

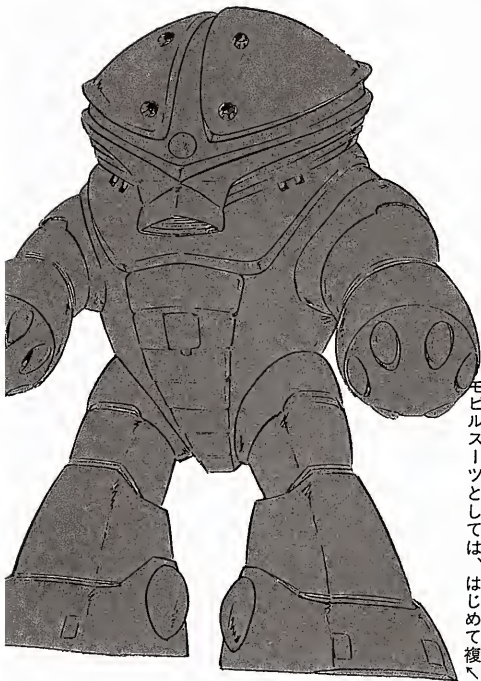
✓(時速約百三十キロ)をマークした。
また、フリージージャード装備で、通常
タイプの対潜兵器には無敵にちかかつ

た。反応炉の冷却上の制限により、陸上
での作戦時間はさほど長くはなかった
が、重装甲をいかして、上陸進攻作戦
で多大なる戦果をもたらした。



MSM-04

アッガイ

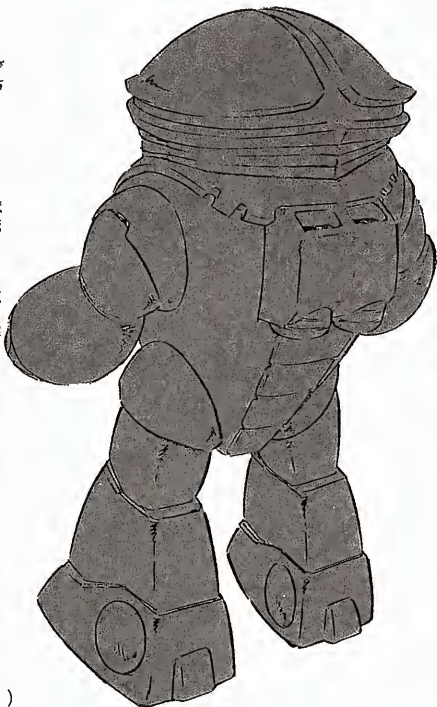


MSM-04 アッガイの開発は、MSM-07 ズゴックのつぎにスタートしたが、完成し、実戦配備されたのは、

アッガイのほうが早かった。機体の部品は、MS-06 ザクⅡからの流用が多く、操縦感覚もザクⅡにしていた。モビルスーツとしては、はじめて複々

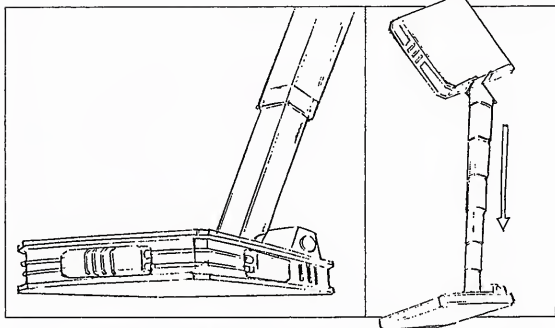
MSV MSM-04

✓座式コクピットが採用され、水陸両用モビルスーツの操縦訓練機としてつかわれることも多かった。

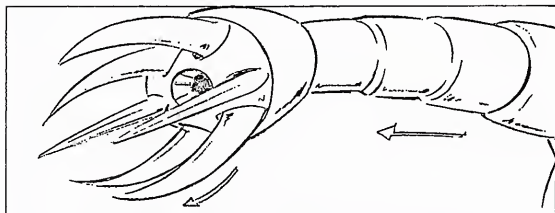


機体の廃熱度が低い
ため、熱センサーに感知されにくく、偵察にもよく使
用された。

●アッガイの搭乗方法と武装とうじようほうほう ぶそう



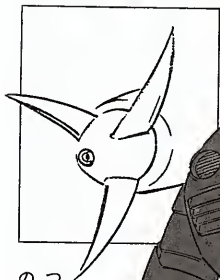
アッガイの搭乗には、腕が利用できるザクとことなり、ハッチがそのままエレベーターとなる方法を採用している。この方法は、MS M-07ズゴックにも採用されている。



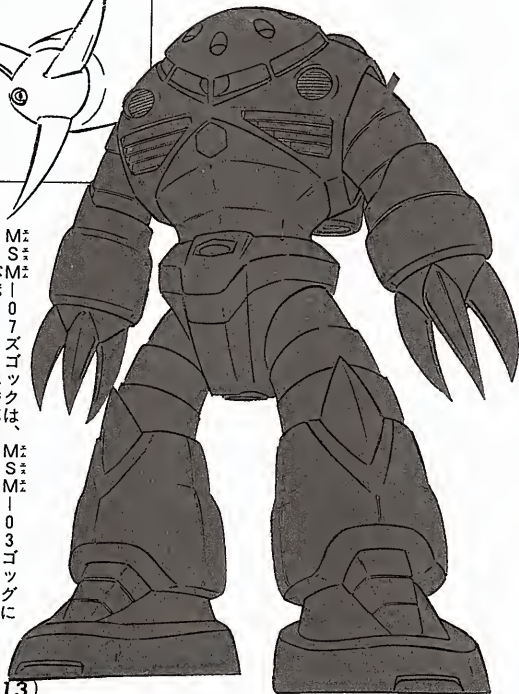
武装は、両腕に内蔵されたメガ粒子砲が2門と、伸縮式のクローが二組だけである。他のモビルスーツにみられるような携帯武器は、並行開発されていない。

MSV

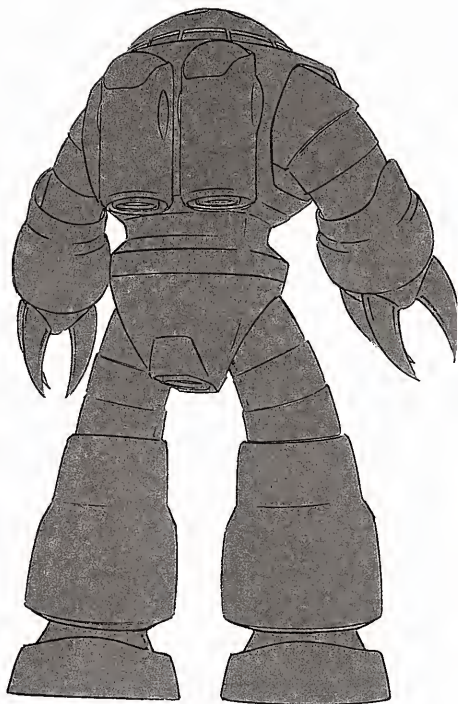
MSM-07 ズゴック



MSM-07ズゴックは、MSM-03ゴッグに
ついて開発された。最終設計にあたっては、ゴッグ
の実戦データをもとに、かずかずの改良がなされた。

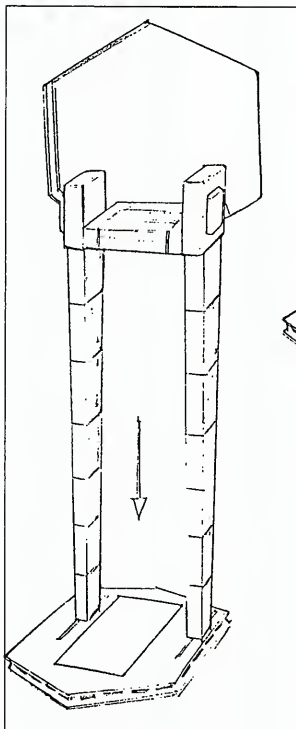


ズゴックの改良には時間がかかり、完成は、あとから開発がはじまったアツガイにおくれをとった。だが、そのかいあって、戦闘力はMSMシリーズ中、

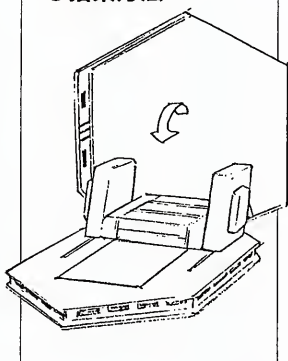


最高のもので、パイロットによつてはザク以上の戦果をあげている。武装は、両腕にメガ粒子砲とクローを一つずつ、頭部には二百四十ミリロ

MSV MSM-07



●搭乗方法 とうじょうほうほう



ケット砲六門が搭載されているが、携帯武器はない。各地の潜水艦隊に配備され、強襲作戦や上陸作戦をおもにこなっていたようだ。同機の生産は、キャリフォルニアベースが担当していた。なお、後期には、反応炉の出力向上と運動性の改良、装甲の材質変更などがなされたMSM-07Sへと生産がきりかえられている。

MSM-10

ゾック

MSM-10ゾックは、MSMシリーズ中、もっとも異様なタイプである。機体に手足はあるものの、もはやモビルスーツのそれとはまったくことなるしろものである。

とくに移動用の脚部

は大型ロケットエ

ンジンが内蔵され、ジャンプ飛行

で移動する方式

で、一般的な

「歩行」は

構造上、

不可能で

ある。将兵

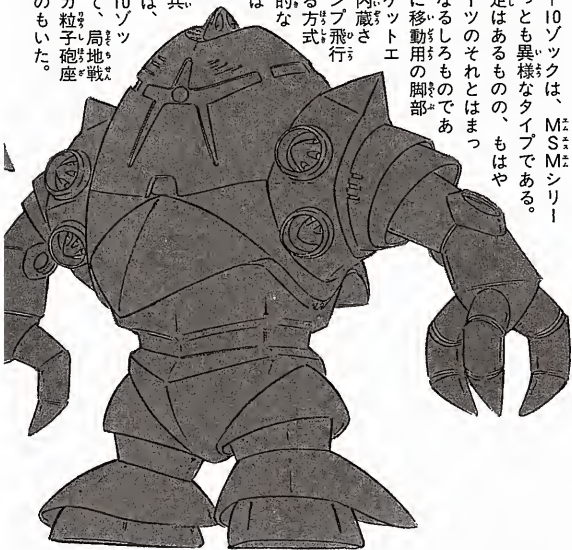
によつては、

MSM-10ゾ

ックをさして、局地戦

用移動メガ粒子砲座

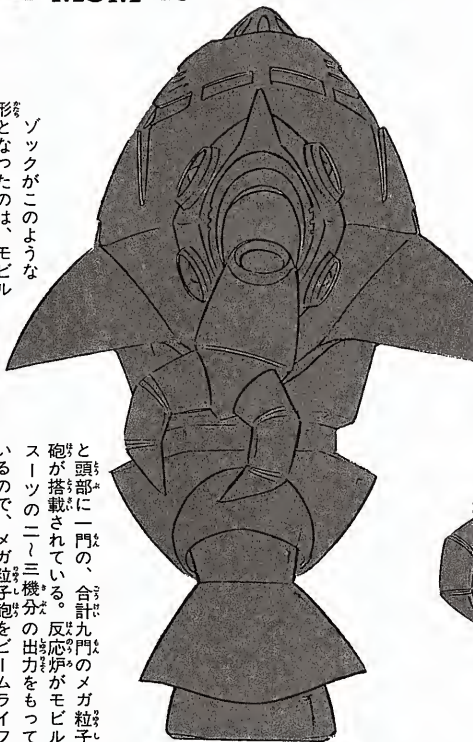
とよぶものもいた。

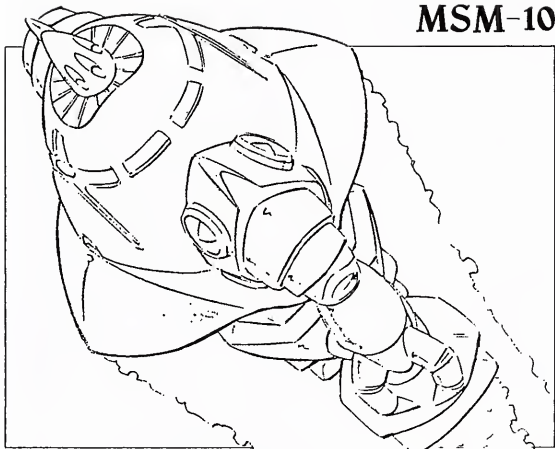


MSV MSM-10

ソックがこのような
形となったのは、モビル
アーマー構想が確立するまえの、過渡
期に設計が進行したからだといわれて
いる。武装は、機体の前後に四門ずつ

と頭部に一門の、合計九門のメガ粒子
砲が搭載されている。反応炉がモビル
スーツの二〜三機分の出力をもって
いるので、メガ粒子砲をビームライフ
ルなみに連射することができ、単純計
算での火力はモビルスーツ一個中隊分
と同等であった。



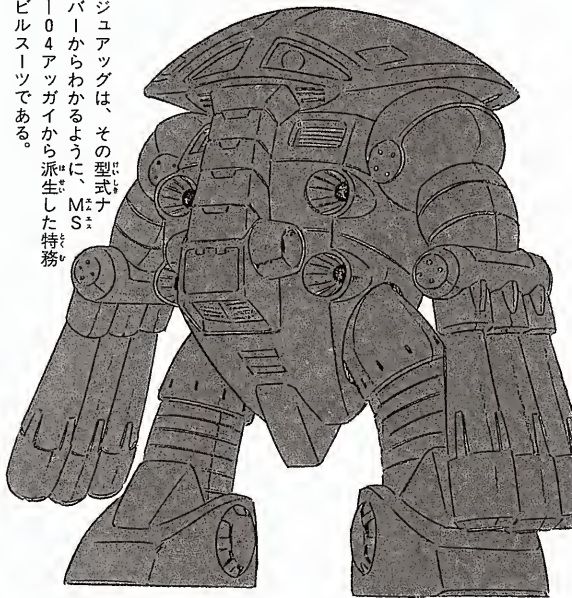


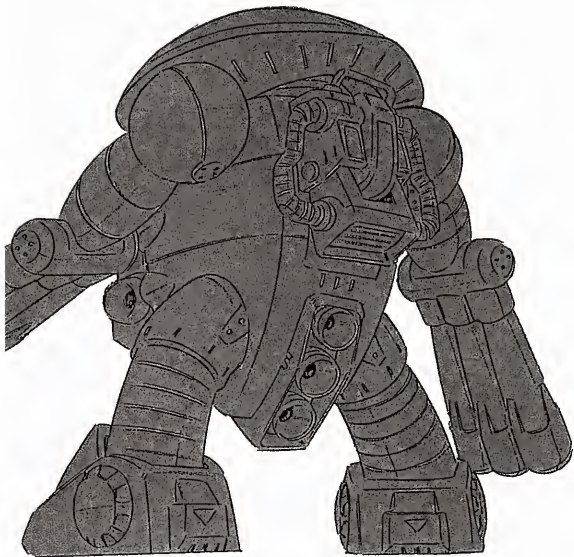
ゾックの生産計画は、
 モビルスーツとしては
 なく、小型モビルアーマー
 として考えられ、グラブプロと
 同様、艦艇用ドライドックに
 生産設備がもうけられた。終戦
 までに生産されたのはプロトタ
 イプの三機のみで、一、三号機は
 北大西洋の潜水艦隊「マンタレイ」
 に、二号機はおなじく北大西洋の
 「マッドアングラー」に配備され、実
 戦テストがおこなわれた。二号機はの
 ちにジャブロー攻略戦に参加し、連邦
 軍のRX-78-2に撃破されたが、一
 号機にいたっては、連邦軍の対潜攻撃
 機におそわれ、輸送中の潜水艦ごと失
 われてしまった。

MSM-04G

ジュアック

ジュアックは、その型式ナンバーからわかるように、MSM-04アッガイから派生した特務モビルスーツである。

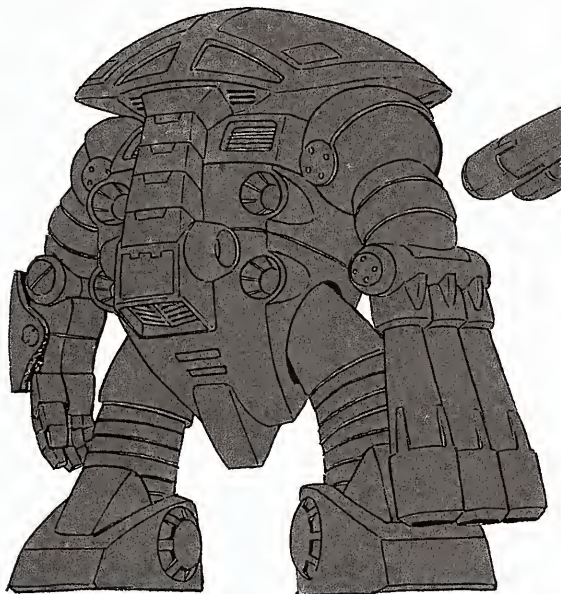




ジュアッグは、^{エム エス エム}MSM-04^{かい ほつ と じょう}アッガイの開発途上で生ま
 れたものだけに、^{がい かん}外観はことなっているが、^{ない ぶ き こう}内部機構は
 アッガイとほとんどおなじである。^{けい し き}型式ナンバーは水陸
^{りょう よう}両用モビルスーツ^{エム エス エム}MSMがつけられているが、どちらか
 といえ、^{しつ ち たい}湿地帯での戦闘にむいている。

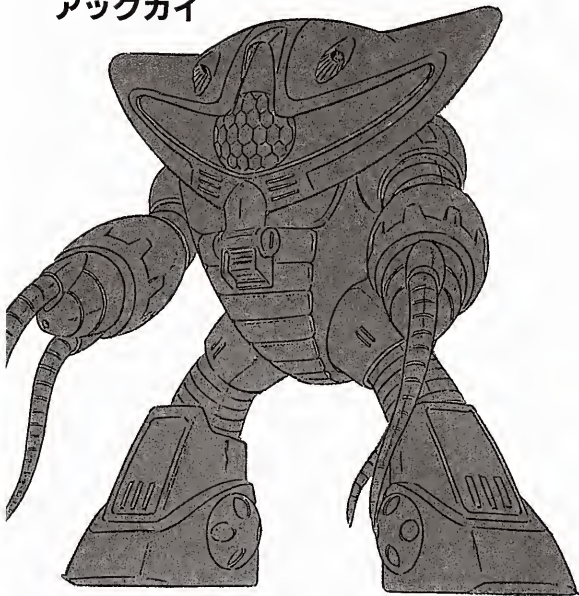
MSM-04G

ジュアッグの武装は、3連装 320 ミリロケット砲が2門で、中距離攻撃を担当するようになっていた。なかには、MSM-08ゾゴックの腕部を換装し、格闘戦能力をもたされた機体もあった。なお、同機の戦闘記録はなく、生産数もあきらかではない。

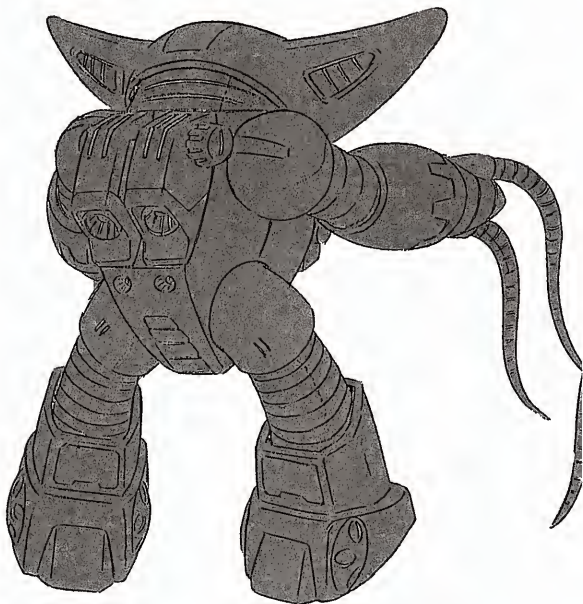


MSM-04N

アッグガイ

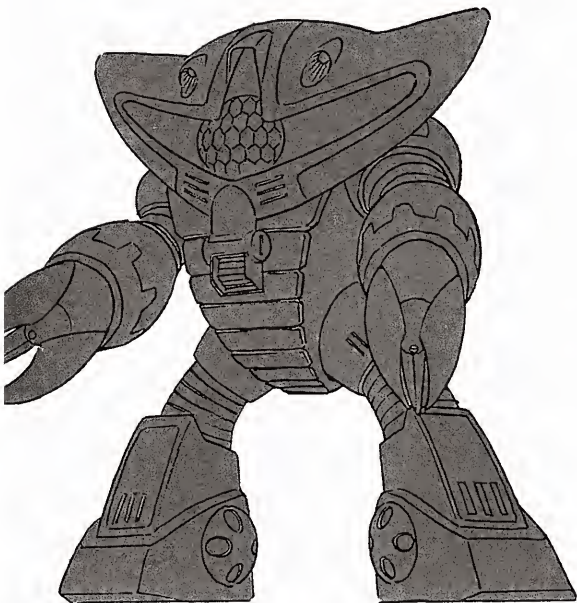


MSM-04^{エム エス エム}アッグガイから派生した特務^{は ぜい}モビルスーツ^{とく し}は、ジュアッグのほか、このMSM-04N^{エム エス エム}アッグガイ^{エス}がある。ジュアッグよりあとにアッグガイからわかれたため、アッグガイのほうがいづばんてき一般的なモビルスーツにちかい。



アッグガイは、ジャブロー^{こうりやくせん}攻略戦^{せつせんせん}で接近戦をおこなう
 ように設計^{せつけい}されているので、運動性は高く、装甲も厚く
 なっている。防水機構^{ぼうすいきこう}をもっているが、ジュアッグと同
 様^{よう}、湿地戦^{しつちせん}タイプとよべる機種^{きしゆ}である。

MSM-04N



アッグガイは接近戦が主任務なので、ミサイルやビーム兵器はなく、回転式のヒートロッドが合計4本搭載されている。一部には、3本タイプのクローを装備した機体もあった。

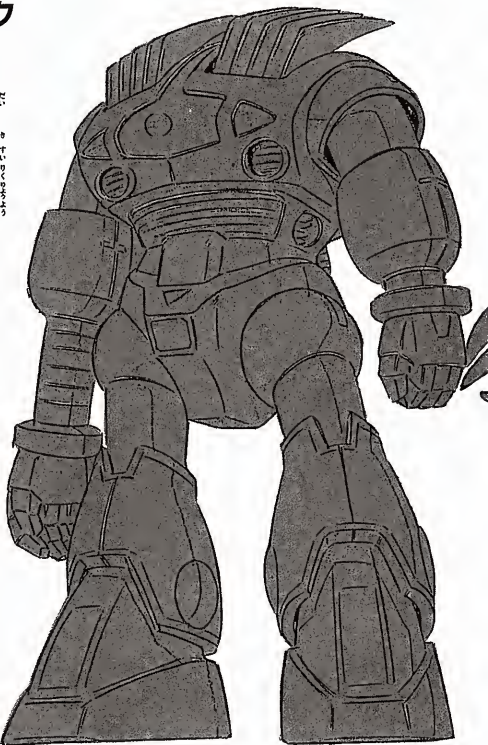
MSV

MSM-08

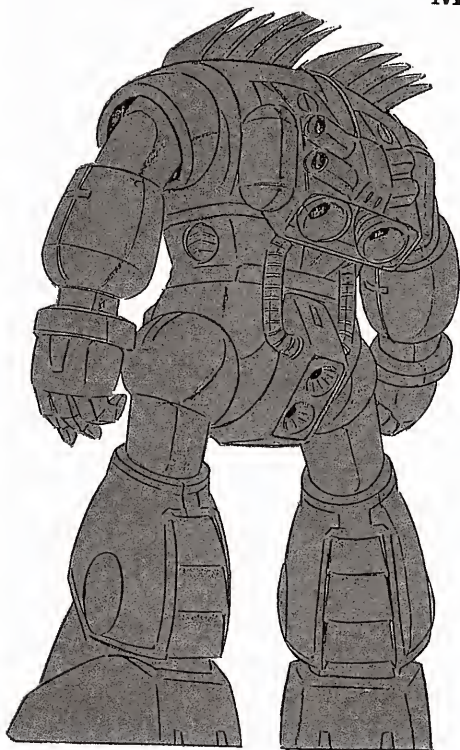
ゾゴック

第二期水陸両用モビルスーツとして
ゾゴックと並行開発されていたMS
M-08ゾゴックは、ゾゴックの制式
採用後にジャブロー攻略戦用特務モビ

ルスーツへと転換された。そのため、特
務モビルスーツ中、もともと一般的な
モビルスーツにちかい機種である。



MSM-08

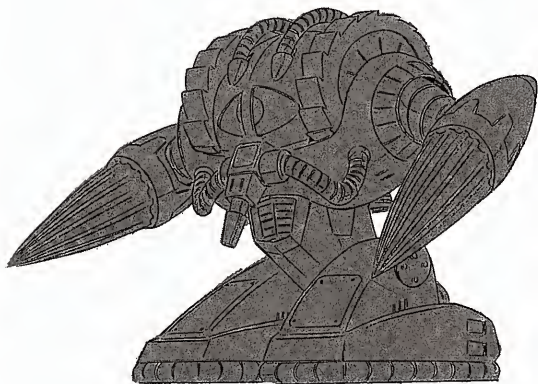


ゾゴックの武器は、ブーメラン式ワイドカッターと、伸縮自在のロッドアームにつけられた強い手首である。とくにこの手首は、指先がスクエアカッ

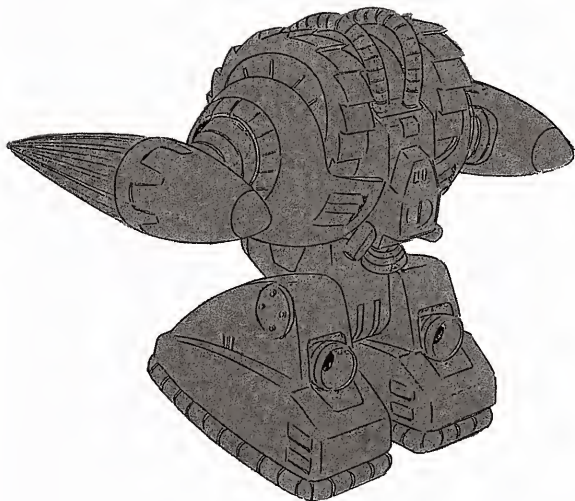
トされ、モビルスーツの装甲を貫通する威力をもっていた。ゾゴックは、格闘戦むけにつくられているので、ピライフルなどの武器はない。

EMS-05

アッグ



ジャブロー^{こうりやくようとくむ}攻略用特務モビルスーツのうちで、もっとも特異^{とくい}なスタイルをしているのが、EMS-05アッグ^{イー・エム・エス}である。ジャブロー^{ちかきう}の地下基地^{しんじゅう}への侵入路^{もく}をひらくのが目的^{てき}で、大型ドリルやカッター、レーザー^{おわがた}トーチをそなえている。単一^{たんいつ}の目的^{もくてき}をつきつめた結果^{けつ}、この形^{かたち}になったわけだが、モビルスーツとはよびにくいスタイルである。



アッグには、オプションでミサイルランチャーを^{とうさい}搭載
 した^{きたい}機体もあったが、^{しんじゆう}侵入路掘削専用機なので、^{せんとうのう}戦闘能
^{りよく}力はほとんどない。なお、^{どうき}同機がいちおうモビルスーツ
^{ぶん るい}に分類されているのは^{うんようじよう}運用上の^{もん だい}問題からで、^{じつ たい}実態は大型
^{ど ぼく こう さく き}土木工作機でしかなかった。

モビルアーマー開発史

汎用兵器として、今次大戦でその能力をいかに発揮したモビルスーツだが、局地戦が多様化するにつれて、汎用兵器であるがゆえに状況に対応しきれないという事態が発生した。解決策として、モビルスーツのバリエーションをふやすことのほかに、支援用兵器の開発が提唱された。

計画された兵器はモビルアーマーとよばれ、攻撃力を重視した移動支援火器で、モビルスーツよりはるかに重装・重装甲であった。モビルアーマー開発の出发点となったのは、第一期モビルスーツ開発計画のさい提出された宇宙ポッド発展案であった。

大戦後期から、実用テストをかねて実戦参加がはじまり、実戦部隊も編成されたが、終戦直前であったため、みるべき戦果をあげることはできなかった。

●サイコミュシステム

サイコミュシステムは、ニュータイプのパイロットがモビルスーツを操縦することを前提につくられたコントロールシステムである。だが、ふううの大きさのモビルスーツに搭載できるほどコンパクトなものではなく、実機への導入はモビルアーマーからだった。

このシステムの特徴は、ミノフスキー粒子の影響下でもリモートコントロールが可能なことである。武器がリモートコントロールできるならば、機体本体が人形をしている必要性はなく、サイコミュシステムを搭載したモビルアーマーの実戦参加が、モビルスーツのそれより早かったのは必然であった。

なお、サイコミュシステム搭載型モビルアーマーは、MAN-03とMAN-08の二機種だけだった。

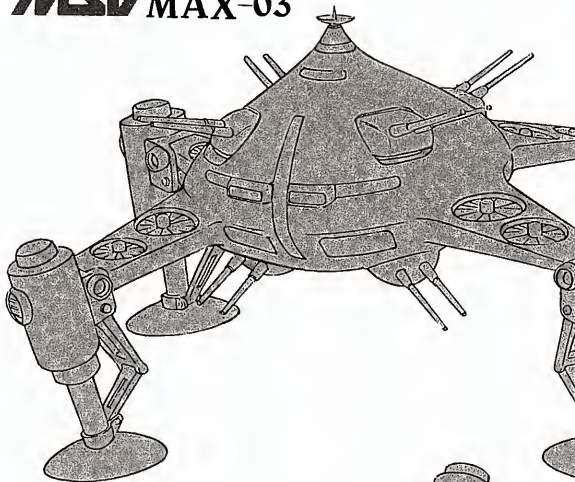
MAX-03

アッザム

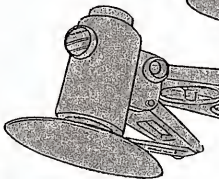
モビルアーマーの第1号機となったMAX-03
アッザムは、モビルアーマー構想が確立するまえに
設計されたため、移動砲座ぐらの機能しかもちあ
わせていなかった。同機の原型となったのは、移動
式対地攻撃兵器として月のグラナダ基地に配備され
たG87ルナタンクで、これを地球での使用にたえる
ように改修したものであった。

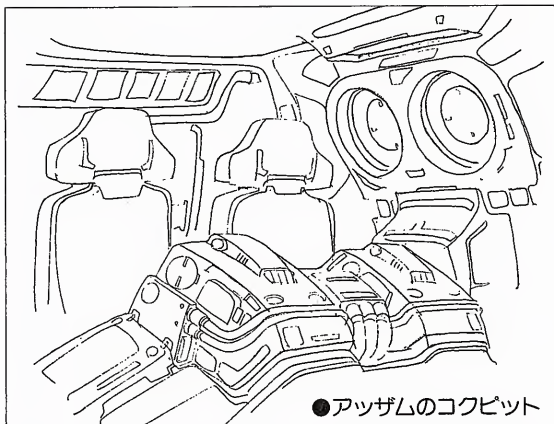


MSV MAX-03



ルナ坦克のロケットエンジンではなく、かわりに8基のホバーエンジンと、ミノフスキークラフトシステムを搭載している。武器は8門の連装メガ粒子砲と、特殊兵器リーダーを装備していた。なお、同機は2機製作され、そのうちの1機が中部アジアで連邦軍のRX-78-2と対戦し、撃破されている。





●アッザムのコクピット

アッザムの機内は、G 87ルナタンクから改修をうけた段階で、大幅に変更されている。とくに、それまで最大のスペースをしめていた機体下部の燃料タンクは、リーダーや、ミノフスキークラフトシステムの粒子発生機、パワーフィールドジェネレーターなどの収容部となった。

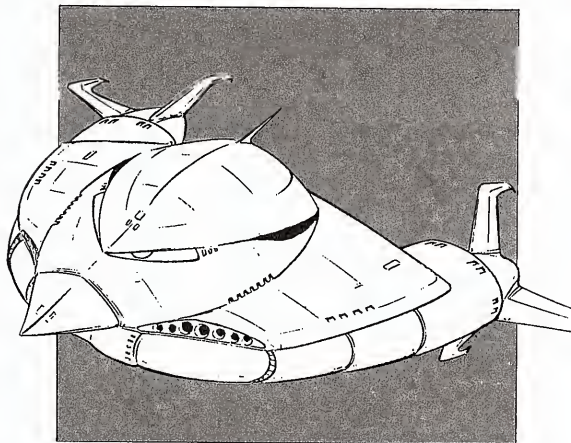
コクピットは基本的にはルナタンクと大差ないが、表示方式やコントロール方式は、使用目的にあわせて改修されている。

乗員はパイロットと射撃手の二名が定員となっているが、非常時にはパイロット一名によるワンマンオペレーションが可能である。

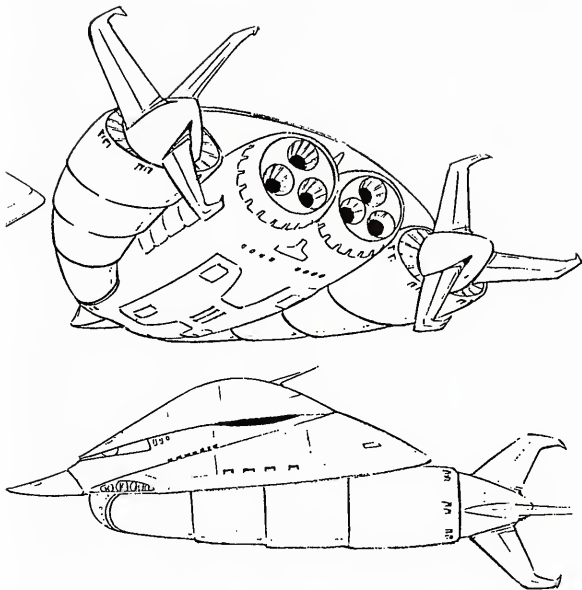
なお、ミノフスキークラフトによる飛行は、かろうじてとんでいるというくらいに性能で、あまり実用的ではなかったらしい。

MAN-07

グラブロ



水中戦用のモビルアーマーは、MSMシリーズと並行して開発がすすめられていた。汎用タイプの水中用モビルアーマーは開発コストがかかりすぎるため、使用目的を限定した数機種が同時に進行していた。そのなかで、もっとも早く完成したのがMAN-07グラブロだが、試作の3機で実戦テストを開始したときに終戦をむかえた。



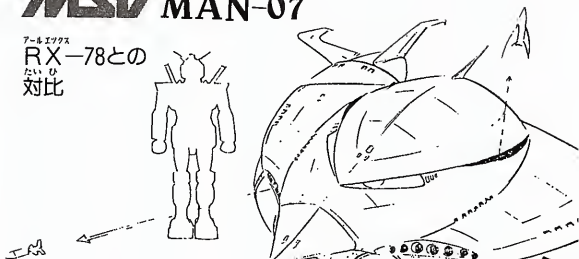
グラブローの製作は、サンディエゴの潜水艦ドックでお
 こなわれた。製作に着手してから完成まで1か月半とい
 うスピードで試作機が誕生し、おもな機能テストはメキ
 シコ湾を中心におこなわれた。その後、試作機は全機、実
 戦参加したが、終戦時にマダガスカル沖で2機が連邦軍
 に捕獲されている。

MSV MAN-07

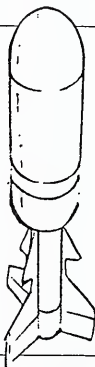
フルエクス

RX-78との

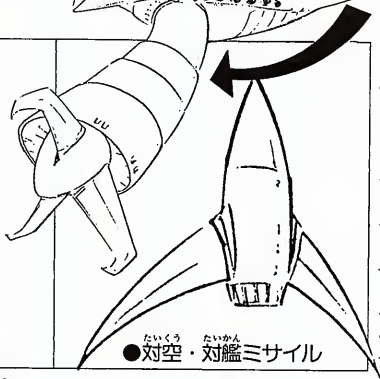
ないひ
対比



●
水中ミサイル



●
対空・対艦ミサイル

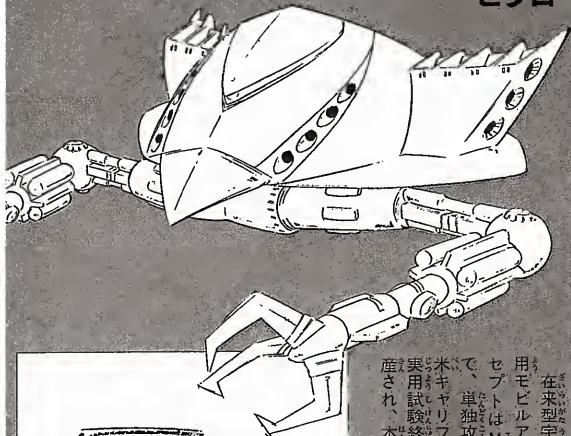


●グラブロの武装

主要武装は水中ミサイルと対空・対艦ミサイルしかないが、クローによる攻撃も可能である。量産機には、艦首にメガ粒子砲の装着が予定されていた。

MA-05

ビグロ

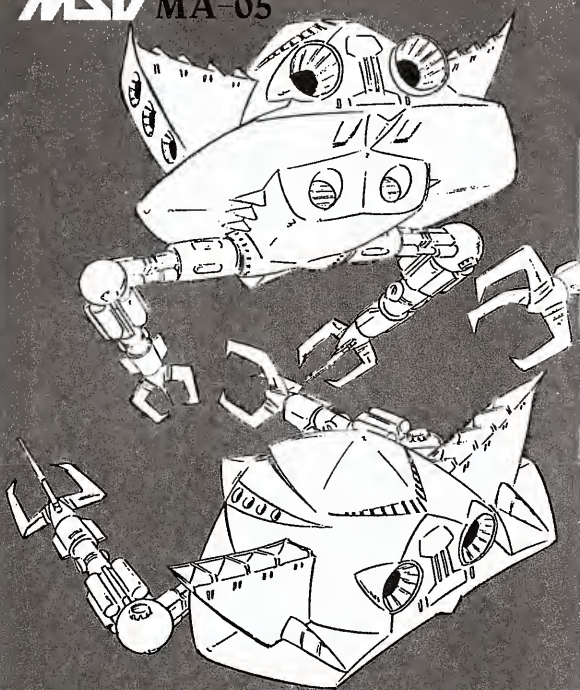


機首がひらくと、
メガ粒子砲があらわ
れる。

●機首のメガ粒子砲

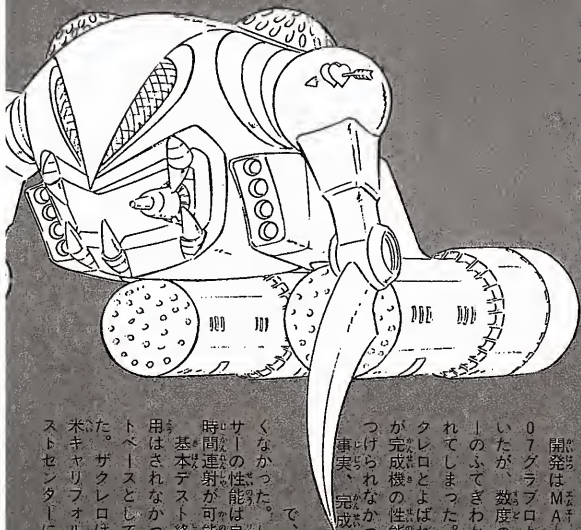
在来型宇宙ボッドから発展した、空間戦
用モビルアーマーの第一号機種。基本コン
セプトはMAN-07グラブロとおなじ
で、単独攻撃が考慮されていた。開発は北
米キヤリフォルニアベースでおこなわれ、
実用試験終了後、初期型として十四機が生
産され、本国へおくられている。

MSV MA-05



ビグロの武装は、機首にメガ粒子砲を1門、左右上側面にミサイルランチャーを4基ずつと、接近戦用のクローつきアームをもつ。

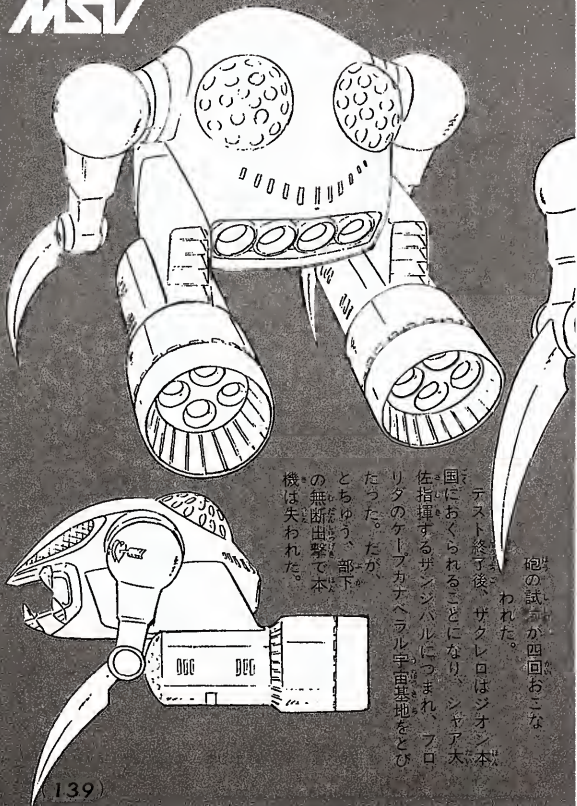
ザクレロ



開発はMA-05ビグロやMAN-07グラブロよりさきにすめられていたが、数度の設計変更や開発メーカーのふてぎわから、大幅に完成がおくれてしまった。計画コードネームはザクレロとよばれたが、型式番号は、軍が完成機の性能に疑問をもったため、つけられなかった。

事実、完成機はメインエンジンとバーニアの推力不足で、加速性能や運動性がよくなかった。しかし、パワーコンデンサーの性能は良好で、ビーム兵器の長時間連射が可能だった。

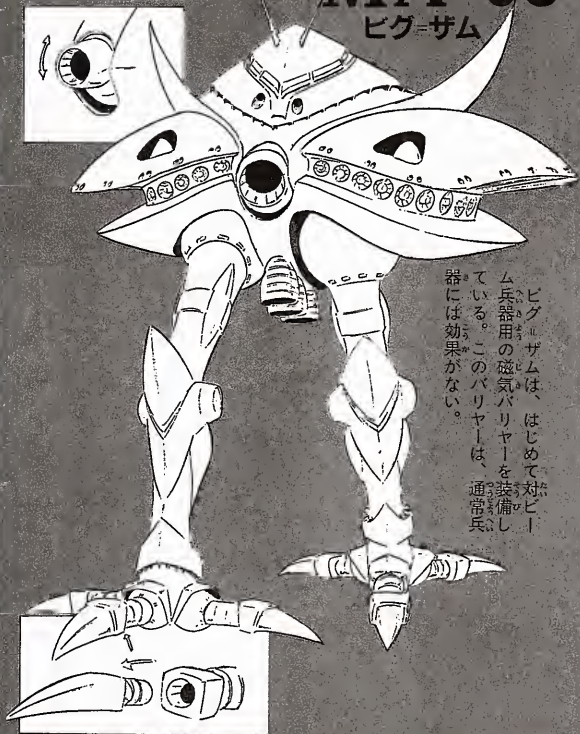
基本テスト終了後、制式機として採用はされなかったが、各種兵器のテストベースとして使用されることになった。ザクレロは、開発基地となった北米キャリフォルニアベースの第三区テストセンターにおくられ、拡散ビーム



砲の試みが四回おこな
われた。
テスト終了後、サクレロはジオン本
国におくられることになり、シヤア太
佐指揮するサンジバルにつまれ、フロ
リタのケトフカナベラル宇宙基地をとび
たつた。だが、
とちゅう、部下
の無断出撃で本
機は失われた。

MA-08

ビグザム

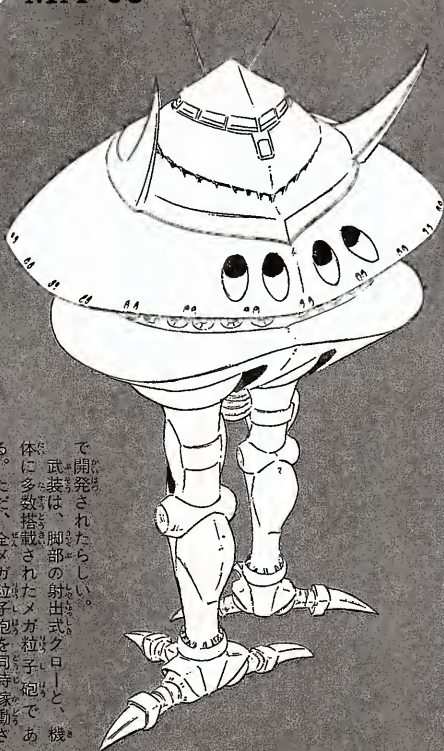


ビグザムは、はじめて対ビーム兵器用の磁気バリヤーを装備している。このバリヤーは、通常兵器には効果がない。

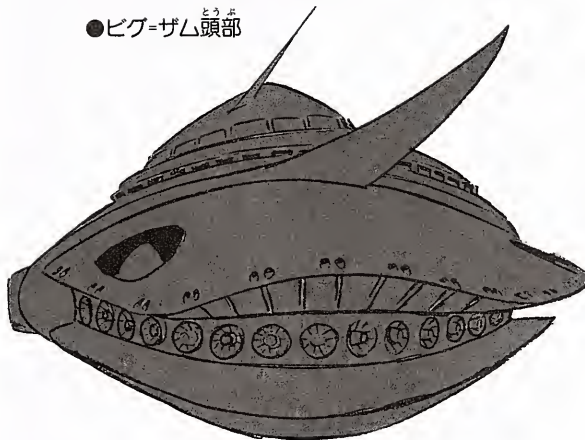
MSV MA-08

攻撃力の強さのみを追求した結果、
できあがったのが、このユニークな形
状をしたMA-08「ビクザム」であ
る。シャブロー攻略戦に投入する予定

で開発されたらしい。
武装は、脚部の射出式クローと、機
体に多数搭載されたメガ粒子砲であ
る。ただ、全メガ粒子砲を同時稼働さ
せるためには、大型反応炉四基の出力
を全開にしておかねばならず、燃料消
費が多くなるため、戦闘時間が十五分
程度になってしまった。



●ビグ=ザム^{とうぶ}頭部



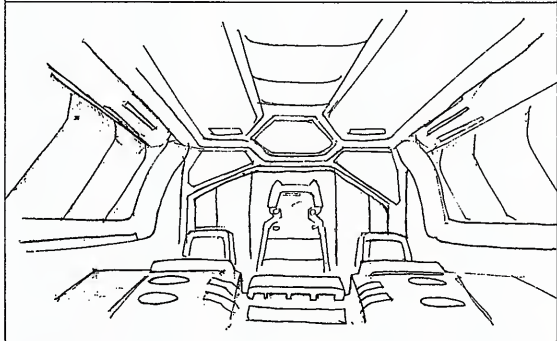
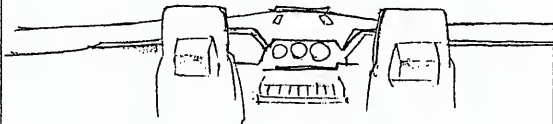
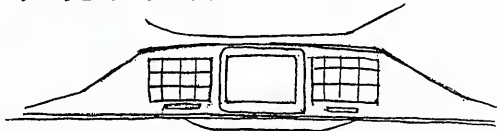
ビグ＝ザムの乗員は、メインパイロットと二名のサブオペレーターの三名で編成される。高度な指揮システムを有するので、コクピットは突撃艇なみの大きさとなっている。

開発はア・バオア・クーが担当したが、ロールアウトしたのは初号機のみであった。予定では、量産後、一機ずつジャブローに降下させ、中隊規模の部隊展開により瞬時に攻略するはずであった。そして、前線への運搬には、ビグ＝ザム一機につきムサイ一隻が必要とされていた。

ビグ＝ザムの実戦参加例は、ソロモン攻略戦のみである。このとき、ビグ＝ザムには、ソロモンの司令官ドル＝ザビ中将がみずから搭乗し、瞬時に戦艦九隻を撃破したが、RX-78-2との戦闘にやぶれ、ドズル＝ザビ中将は戦死した。

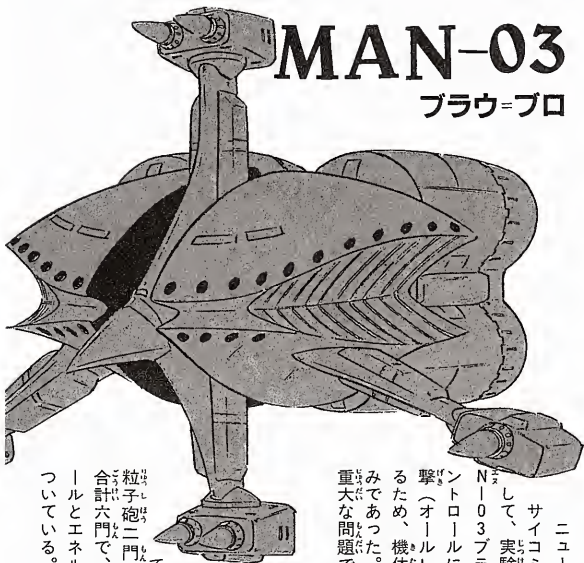
MSV MA-08

●ビグ = ザムのコクピット



MAN-03

ブラウ=ブロ



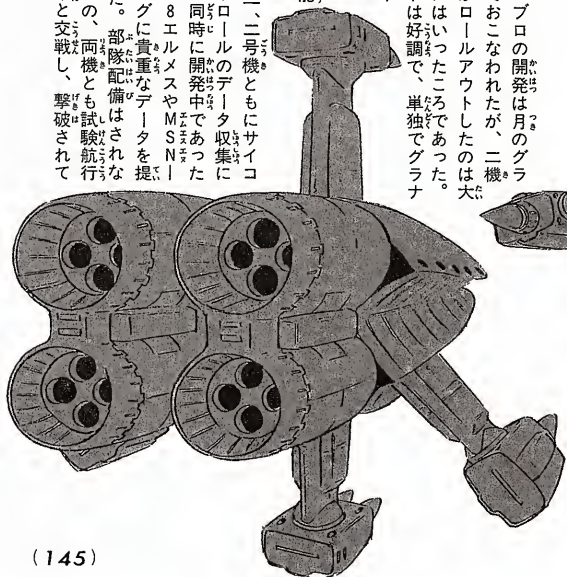
ニュータイプパイロットによるサイコミュシステムのテスト用として、実験的につくられたのがMAN-03ブラウ=ブロである。有線コントロールによるメガ粒子砲の立体攻撃（オールレンジ攻撃）をおこなわせるため、機体の大きさは大型突撃艇なみであった。また、パイロット保護も重大な問題であったから、機体はメインエンジンユニットをふくむ五個のブロックに分離が可能であり、非常時には中央のコクピットブロックが離脱し、自力航行できるようになっている。武装は、連装メガ粒子砲二門と単装メガ粒子砲二門の合計六門で、それぞれの砲にコントロールとエネルギー供給用のケーブルがついている。

MSV MAN-03

ブラウ・プロの開発は月のグラ
ナダ基地でおこなわれたが、二機
の試験機がロールアウトしたのは大
戦も後期にはいつたころであった。
機能テストは好調で、単独でグラナ

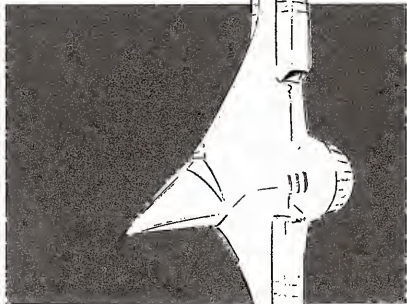
ダからサイ
ド6へ航
行すると
いう高性能
をみせた。

同機は、一、二号機ともにサイコ
ミコントロールのデータ収集に
使用され、同時に開発中であつた
MAN-08エルメスやMSN-
02ジオングに貴重なデータを提
供していた。部隊配備はされな
かったものの、両機とも試験航行
中に連邦軍と交戦し、撃破されて
しまった。

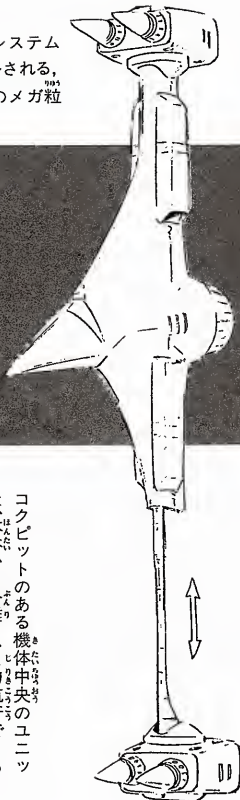


▶サイコミュシステム
でコントロールされる、
ブラウ = プロのメガ粒
子砲。

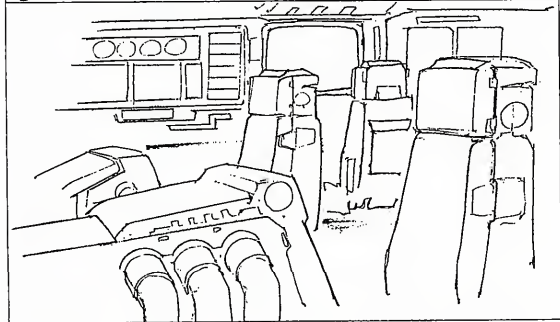
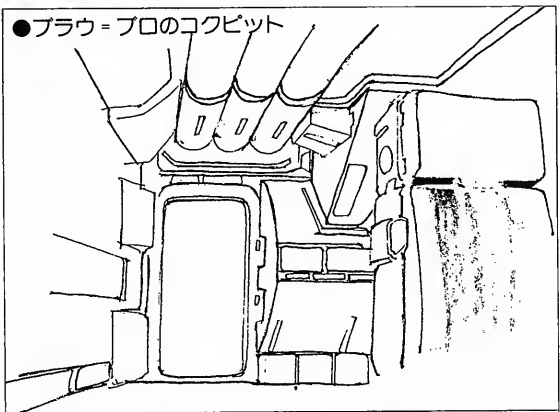
EM-03
MAN-03ブラウ＝プロのコク
ピットは、これまで登場した^{とうじやう}いかなる
兵器にもみられない独特なもので、し
いていえば、MSN-02ジオン^{エス}グに
ちかいものである。



コクピットのある機体中央のユニッ
トは、本体から分離し、自力航行できる
ほか、二門の連装メガ粒子砲^{りゅうしほう}を有して
おり、モビルスーツ二機^{ふたき}の戦力^{せんりき}が
あるといわれている。
コクピットは戦闘専用のサブコク
ピットと、全システムのコントロール
ができるメインコクピットにわかれ、
サイコミュシステムはサブコクピット
からコントロールするようになってい
る。乗員は三名である。



●ブラウ = プロのコクピット



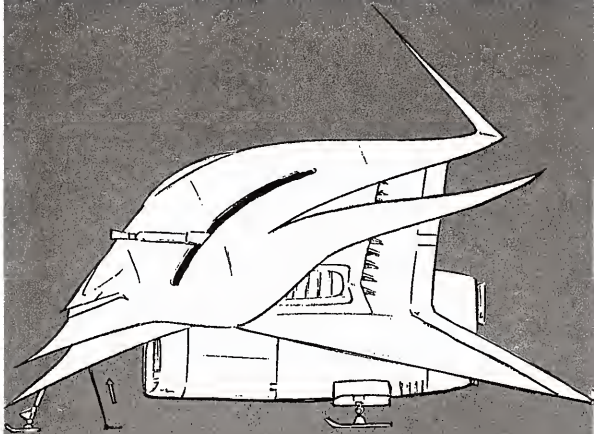
MAN-08

エルメス



ニュータイプ用のモビルアーマーとしては初の実戦タイプであり、究極のスタイルでもある。機体のコントローラから、武器の操作まで、すべてサイコムシステムを利用したコントロール方式がとられている。そのため、コクピット内部にはレバーやボタンのたぐいは必要最低限しかなく、ほとんどのスペースは各種表示装置になっている。エルメスの武装は、機体に二門のメガ粒子砲をもつほか、ビットが十基搭載されている。もちろん、ビットは機体内部に収容されており、必要に応じて射出し、自由に回収することができる。





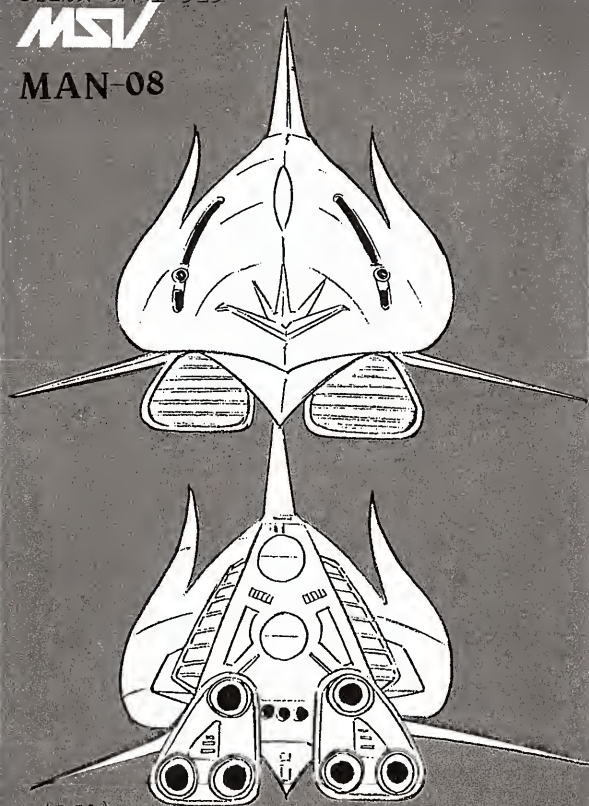
ビットによるオールレンジ攻撃ができるエルメスは、接近戦や格闘戦をおこなう必要がないので、その形状はきわめてシンプルなものになっている。機体下部のスペースは、すべて推進エンジンがしめ、その上部後方はビットの収容スペースである。その前方にコクビットが配され、左右にメガ粒子砲が装備されている。

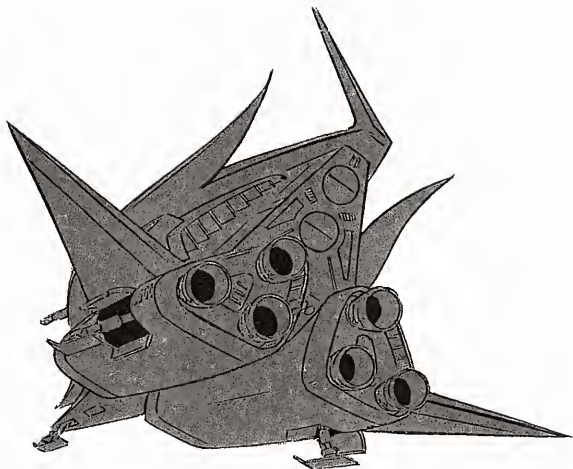
機体全面は、かなり厚めの装甲板でおおわれている。宇宙機にしてはバーニヤの数が少ないが、これは装甲に弱点をつくらないためである。方向転換用バーニヤなどをもたないぶん、機体安定用ジャイロが補助的に作動するようになっている。

また、乗員に高Gがかからないよう、コクビットのまわりに高性能緩衝装置がセットされている。

MSV

MAN-08





●エルメスとビット

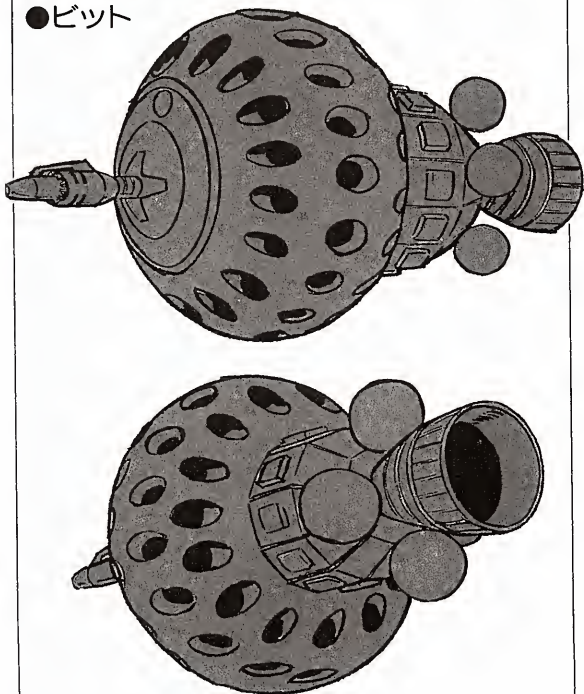
MAN-08 エルメスの最大の特徴は、無人攻撃ポッド「ビット」にあるといつてよい。ビットは、ビーム砲とそれにパワーを供給する超小型反応炉、多数の高機動型バーニヤ、モノアイ一基からなる。

ビットのコントロールは、無線サイコミュシステムによつておこなわれる。この方法は、パイロットの脳波を拡大放射することにより、ビットのモノアイがとらえた映像が、そのままパイロットの知覚となる。このシステムは、高度なニュータイプのみが使用可能であった。

エルメスは三機製作され、ララァ・スン少尉が二号機で、クスコ・アル中尉が三号機で実戦参加したが、両機とも撃破されている。

MSV MAN-08

●ビット



ジオン公国独立戦争史

●南極条約

ルウム戦役直後、ジオン公国は地球連邦に対し、降伏を勧告してきた。当時、連邦は、総人口の約半数と戦力の四分の一以上を失っており、ジオンの強大な戦力のまえに降伏もやむなしという声もではじめていた。かくして、両国は南極において講和会議のテーブルにつくことになった。だが、会議の開催中、ジオン公国から奇跡の脱出をとげたレビル將軍が、ジオンに兵なし。と演説したことから連邦は強気に転じ、講和会議は戦時条約会議へ変更していった。ここに締結された「南極条約」では、核・生化学兵器の使用禁止、捕虜の虐待などの禁止、コロニーへの直接攻撃の禁止、木星からの資源輸送路の不可侵などがうたわれ

ている。

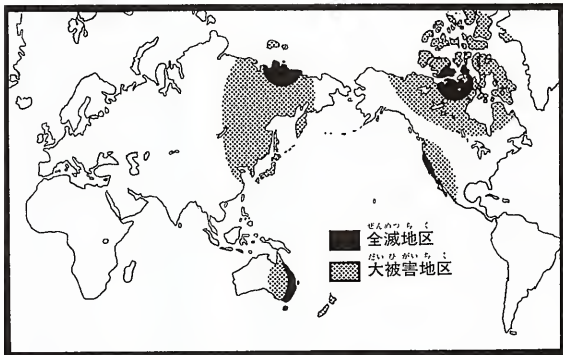
この時点におけるジオンの国力は、連邦が予想していたよりも、かなり低かったのである。ただ、開戦時の交戦により両軍とも大きな損害をうけ、宇宙空間での戦力は低レベルでバランスがとれており、戦局は膠着状態となった。

●地球侵攻作戦

さきの会議で勝利を確定的なものにできなかったジオン軍は、軍需物資確保の面から、地球への直接攻撃をおこなうことにした。

地球攻撃軍の編成は、キシリア・ザビ少将指揮下の突撃機動軍の第一機動歩兵師団を改編、増強してなされ、司令官にはガルマ・ザビ大佐が就任した。しかし、ルウム

●ブリティッシュ作戦の被害地域



戦役での損失はまだ回復されず、戦力としては十分なものではなかった。地球攻撃軍に編入された部隊には、開戦直前に各サイドから秘密裏にジオンに入国した人々で構成されたものもあった。彼らの大部分は、連邦政府によりコロニーへ強制移住させられた人々で、連邦に対する反抗心が強かった。ジオン公国は、これらの人々と直接、あるいはサイド6をとおして開戦以前からコンタクトをとり、ジオン公国への脱出の手びきをしていた。

●第一次降下作戦

ジオン軍の第一回地球侵攻作戦は、開戦後三か月の、宇宙世紀七九年三月一日におこなわれた。降下部隊は地球攻撃軍第一地上機動師団、降下ポイントには中部アジア地区のテンシヤン(天山)山脈北部のバルハシ湖およびアラール海、攻撃目標は連邦軍とバイコノール宇宙基地であった。

●地球攻撃部隊の降下ポイント



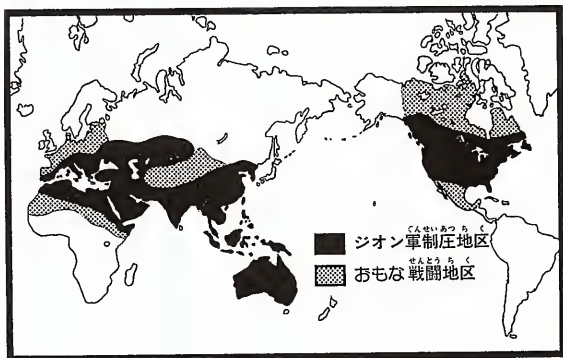
●第二次降下作戦

第一次降下部隊の主力は、モビルスーツであり、大半がMS-06FザクIIであった。多少の車両と歩兵も同行したが、戦力としてはたいしたものではなかった。目標を制圧したあと、この宇宙基地を利用して、戦車や航空機などを地上に降下させる作業がはじまった。その後、戦闘部隊はふた手にわかれ、一隊はカスピ海北岸からヨーロッパへ、もう一隊はカスピ海東岸を南下して中東地域をめざした。

なお、このとき降下したモビルスーツのうち、MS-06ザクIIのほとんどが、オーバーホールをうける時点でJタイプへと改修されている。

第二次降下作戦は、降下作戦としては最大のもので、第二、第三地上機動師団、航空部隊と海洋部隊の一部、ならびに地球攻撃軍司令部が降下している。

降下ポイントは北アメリカの東西両沿岸



●第三次降下作戦

で、作戦目標は軍事および工業施設の占拠と、食料の確保であった。とくに軍事施設では、無傷にちいかたちで制圧できたキャリフォルニアベースが、のちの地球侵略に重要な地位をしめる。

降下にあたっては、連邦軍の反撃はほとんどなかった。連邦軍の大部分がブリティッシュ作戦で被害にあった地域に出動し、復旧作業にあたっていたからである。ブリティッシュ作戦によって生じた軍事的空白地帯を降下ポイントにえらんだ、ジオン軍の作戦勝ちといえる。

第二次降下作戦がおこなわれたのは三月十一日だが、その一週間後の三月十八日には、第三次降下作戦が開始された。第四地上機動師団と多数の支援部隊が降下したが、これは軍事的というより資源確保の意味合いが強かったようだ。

●ジオン軍のおもな基地



地球に降下したモビルスーツの主力は、第一次がFタイプのザクII、第二次、第三次がJタイプである。第三次以降にはS-107もくわわっているが、数がザクIIが圧倒的に多かった。

●補充部隊降下

補充部隊は、開戦以前にジオンに入国した人々の、いわゆる「外人部隊」であった。彼らは一週間戦争の前後に入隊し、降下直前に実戦部隊に配属されている。

「外人部隊」のほとんどは、第二次降下のさいに中東の紅海やペルシア湾岸においているが、例外なく地上での激戦区に投入されている。おもてむきは、反地球連邦意識が強く、最後の兵までたたかいぬく優秀な兵士であるといわれているからである。だが、じっさいは、戦後処理のさいに、外人部隊はきりすてやすく、またその責任を問われても逃げやすいという、グレenvilleザビ総帥の政治的判断によると思われる。



●マリックベ部隊降下

マリックベ大佐が指揮する師団は、鉱物資
源の採掘と本国への輸送が任務であった。
宇宙世紀七九年三月四日、カスピ海北岸に
降下し、各地の鉱山施設を制圧して、その
運営にあたった。この師団は、ほとんどが
工作・技術部隊で編成され、戦闘部隊は多
くなかった。

また、この部隊はキシリア少将直属で、
地球攻撃軍の指揮系統に組み入れられては
いなかった。地球上に二つの命令系統をお
いたことは、ジオン軍の大きなあやまち
で、以後の戦局に大きな影響をあたえるこ
ととなった。

●キャリフォルニアベース

ジオン軍の一連の地球降下作戦のうち、
最大の戦果は北アメリカ西海岸のキャリフォ
ルニアベースの制圧であった。このキャリ
フォルニアベースというのは、一つの基地

ではなく、海軍軍港、空軍基地、宇宙ポ
ート、各種兵器開発研究・試験場など、合計
二十にもおよぶ軍事施設を総称したもので
ある。ブリティッシュ作戦によって、沿岸
地区の施設は壊滅したが、内陸部に被害は
なかった。連邦軍の防衛部隊のほとんどが
被害地の復旧作業に出動したすきをつい
て、ジオン軍のモビルスーツ部隊が強襲、
ほとんど無傷のまま地球攻撃軍の手にお
ちた。制圧後、約二週間にして各施設は修
復され、地球攻撃軍最大の基地として機能
しはじめていた。モビルスーツをはじめ、
各種兵器の開発・生産から、世界各地への
物資集配センターの役もはたしていた。
大戦も後期にはいったころ、地球攻撃軍
司令官ガルマ・ザビ大佐の戦死により、一
時、命令系統に乱れが生じた。この機に乗
じた連邦軍は、いつきにキャリフォルニア
ベースにせめよせ、これを奪回した。それ
以後、連邦軍はここを失うことなく、ジャ
ブローにつぐ工廠として稼働させた。

MOBILE SUIT in ACTION

●モビルスーツ イン アクション

MS-07H エムエス グフ飛行試験型

MS-07Hグフ飛行試験型の記録は、ほとんどが数値データでのこされており、写真などの映像記録は少ない。これは数少ない写真のひとつで、第七回飛行試験のときのものである。テストは、アリゾナのフラットネイル空軍基地でおこなわれ、YMS-07Aから改修されたHタイプが使用されている。

撮影は、技術部門によっておこなわれたとあるが、撮影者は不明である。一部には、広報部の写真班によって撮影されたとする説もある。

この日おこなわれた試験は、垂

直離着陸、空中でのバランス、燃料消費率などにかんするものだった。

上空には、警戒のため偵察機ルックンが飛行している。レーダーが対地モードになっているのは、レーダーによるHタイプの飛行データを収集するためである。通常のテスト中は、ルックン、およびドップ戦闘機が滞空しているが、この日は、ルックンだけだったようだ。

手まえのグループは、開発チームのモビルスーツ整備班である。

●モビルスーツ イン アクション

MSV



MOBILE SUIT in ACTION

ワイ エム エス

YMS-09 プロトタイプドム

完成したYMS-09プロトタイプドムの一号機。ジオン本国では、このモビルスーツの開発に全力をあげていた。そのため、広報部による写真公表やニュースも数多くおこなわれた。連邦軍も、この新型モビルスーツには注目していたが、当時の連邦軍のモビルスーツは誕生したばかりで、まだ実戦配備まではおよばなかった。

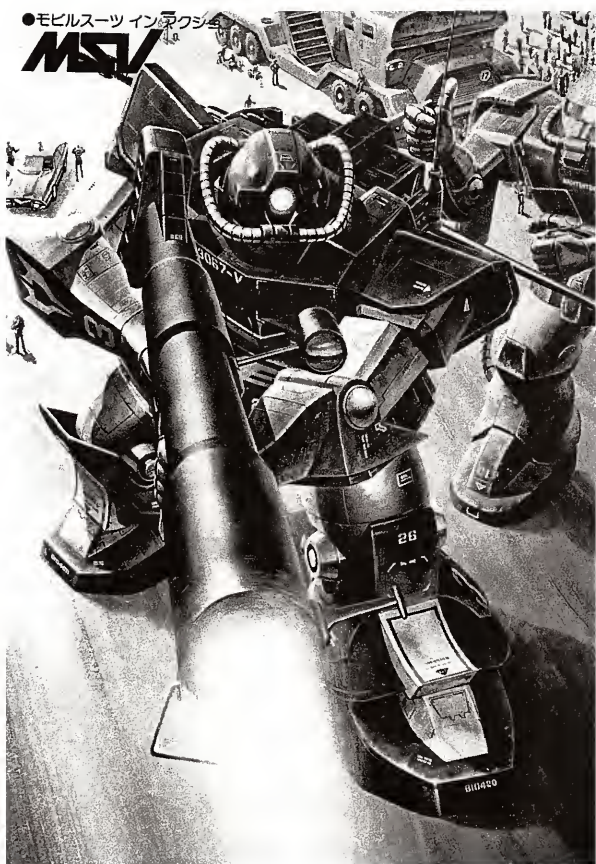
この写真は、記録フィルムの一コマで、ジオン本国の広報部写真班によって撮影された。写真のコメントは、同時開発の武器について、この新型モビルスーツがただちに量産されるだろうということだけで、写真やモビルスーツの性能に坎する説明はなにもされていない。

写真は、YMS-09 完成の記念式典の

ときとられたもののようだ。通常の機能試験や武装試験実験ではみられないものが、いくつもある。第一に、各方面の將軍や高級将校のすがたが多いこと。第二に、報道関係者がいること。第三に、後方で作業している第二十六メンテナンス、スコードロンのMS-06Jに式典用のマーキングがみられることからだ。この式典は、三百六十ミリロケット砲試験として、キャリフォルニアベース北側の第五試験場で、クランベリー大佐によっておこなわれた。

●モビルスーツ イン アクション

MSV



MOBILE SUIT in ACTION

ワイエムエス

YMS-09D

デュー

ドムトロピカル

テストタイプ

これは、戦時中には公表されなかった写真である。記録のたぐいもあまりのこつていず、戦後の調査がおわるまでくわしいことはわからなかった。連邦軍のオデッサ作戦の直前に撮影されたものらしいが、正確な撮影者や日付は不明である。

写真のモビルスーツは、YMS-09Dドムトロピカルテストタイプで、北アフリカ戦線のカラカル部隊で実戦テストをおこなっていたものとされている。

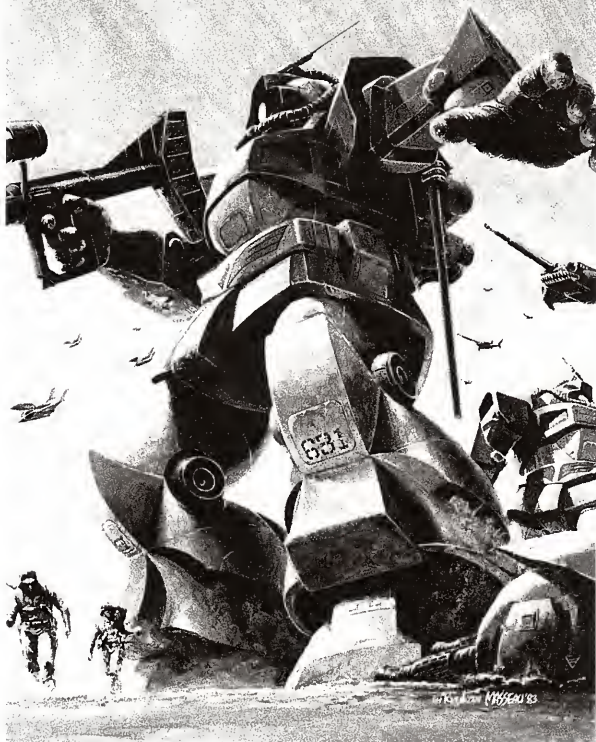
カラカル部隊に配備されたDタイプのドムは、予備をふくめ四機であった。そのうち二機は、量産先行型のドムをDタイプ仕様に改修したものである。この後、量産先

行機や量産機のなかから三十機をえらび、Dタイプドムがつくられた。熱帯戦用モビルスーツの研究機として使用するための改造である。だが、キャリフォルニアベースが陥落するまでに作業が完了したのは二十機で、そのうち前線にわたったのは十数機でしかない。

連邦軍がキャリフォルニアベースを奪回したとき、改修中の機体が数機発見されたが、完成機は、終戦まで連邦軍の手にはいらなかった。

●モビルスーツ イン アクション

MSV



MSV '83

MOBILE SUIT in ACTION

ワイエムエス

YMS-09D

デュー

ドムトロピカル

テストタイプ

熱帯地仕様のドムのうち、戦時中に公表された唯一の写真である。公開を目的として撮影されたものではなかったのだが、ジオン本国内の士気高揚のため、急遽公開されたらしい。ふだんとことなり、公表にあたっては、写真の解説がかなりくわしくおこなわれている。

この機体は、YMS-09プロトタイプドムの二号機を改修したものである。つづいて数機のドムも、テスト用に改修中であったらしい。手まへの機体は、データ収集用のドム、後方のモビルスーツは、MS-06Dデザートザクである。このデザートザクは、ドムのテスト支援と完成時

の性能チェックを同時におこなっていた、スカラベ部隊のものである。

撮影した日の試験では、ホバリング時に おける三百六十ミリのジャイアントバズの 試験がおこなわれた。場所は、アリゾナの 実用試験フィールドであったとされている が、事実是不明である。

この後、Dタイプのドムは、北アフリカ 戦線のカラカル部隊にまわされて実戦テストをくりかえされ、スカラベ部隊は中東へ実戦配備された。

●モビルスーツ イン アクション

MSV



MOBILE SUIT in ACTION

MS-14C ゲルググキャノン

宇宙世紀八〇年にはいると、ジオン軍は戦局の公表を大幅に制限するようになった。しかも、自軍勝利のみを報道し、あたかもジオン公国が有利な立場にあるかのようにならせた。ソロモンやア・バオア・クー攻防戦などは、戦後になってようやく国民の知るところとなったほどである。

だが、ア・バオア・クー攻防戦の直前にあったエース部隊と連邦軍宇宙艦隊との戦闘だけは、大々的に公表された。軍の公式コメントでは、ア・バオア・クーに進撃するテアンム艦隊に、エース部隊のMS-14Cゲルググキャノン十二機と、ムサイ級巡洋艦三隻が攻撃をかけたのである。

背後から攻撃をうけたテアンム艦隊は、サラミス級巡洋艦二隻と改コンプス級宇

宙空母一隻を失う。このほかにも、モビルスーツ十四機、セイバーフィッシュ二十二機が撃破された。

一方、エース部隊でもゲルググキャノン二機が撃墜され、三機が中破。ムサイ一隻が大破、航行不能という損害をだしている。エース部隊には、多くのニュータイプパイロットが編入された。06R-2タイプで活躍したジョニー・ライデン少佐や、トーマス・クルツ中尉、ジェラルド・サカイ大尉らもそのメンバーであった。





●モビルスーツ



MOBILE SUIT in ACTION

エム エス
MS — 14C

ゲルググキャノン

この写真は、アッパオアークー攻防戦のときに、連邦軍に拿捕されたザンジバル級巡洋艦キマイラから押収されたものである。

「宇宙世紀八〇年一月五日、コレヒドール暗礁空域において連邦軍バトロール艦隊と遭遇。交戦後、これを撃破。戦果、マゼラン級戦艦一隻、サラミス級巡洋艦二隻。損害なし。」という写真につけられたコメントは、多くの軍人や軍事評論家のあいだに物議をかもした。

なぜなら、連邦軍の作戦行動記録、喪失艦リストならびに艦籍名簿などでは、その日時・場所には、連邦軍の艦隊はおろか、戦闘機一機たりともいなかったはずだからである。しかし、写真にいつわりはない。こ

のなぞは、いくたの研究者の努力にもかかわらず、戦後になつても解明されていない。戦後の連邦軍の公式コメントでは、開戦時にジオンによつて制圧されたコロニーに駐留していた連邦軍の艦が捕獲され、それが、コレヒドール暗礁空域においてエース部隊の標的に使用されたのではないかと、ということである。

しかし、これ以後、連邦軍はすべてのコメントをさけているので、この写真についての正確な内容は、いままって不明のままである。

ZION DUKEDOM

**MILITARY
OFFICER'S REGISTER**

こう こく ぐん
ジオン公国軍
ぐん じん めい かん
軍人名鑑

**Department
Of
The National Defense**

ジョニー＝ライデン

軍籍番号／P M O 五六三三〇二七九 A
所属／突撃機動軍

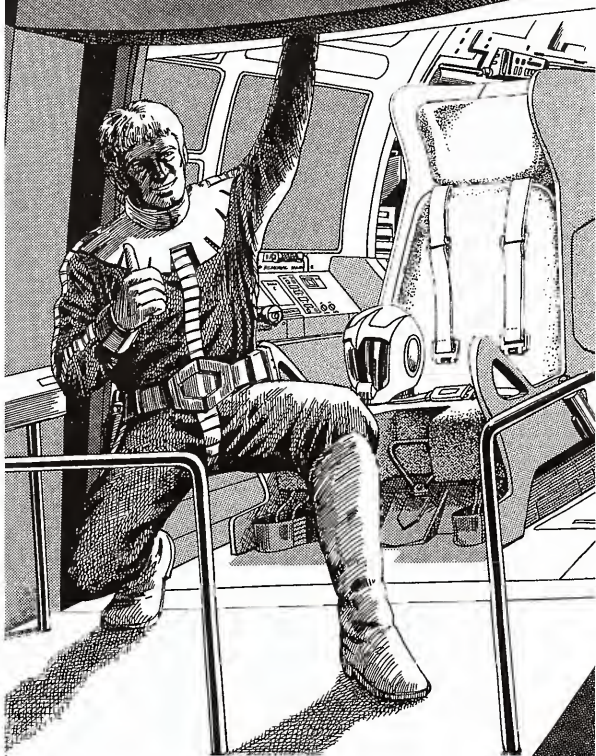
略歴／宇宙世紀五十六年、サイド3への第一次移民の三世として生まれる。旧オーストラリア大陸から宇宙へのぼった、ジョンではめずらしい、アメリカ系の血をひく男である。

二十二歳で高等教育課程終了とともに、国防軍へ志願する。兵学校をへて、突撃機動軍に、モビルスーツパイロットとして配属される。

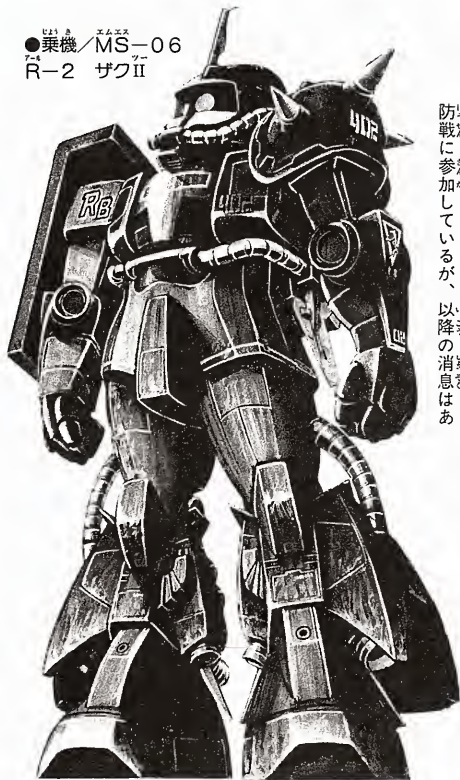
一週間戦争のときは、曹長としてMS-106CザクIIを駆って戦場にあつた。ルウム戦役で戦艦三隻を撃沈した功績により、大尉に昇進するとともに、乗機をMS-106FザクIIにかえた。このときからボディーカラーを、真紅に黒の

アクセントがはいったものになっている。そのため、シャア少佐機とよくまちがわれたようだ。その後、少佐に昇進し、乗機もMS-106R-2ザクIIとした。宇宙世紀八〇年一月、本国の要請により、エース部隊配属となり、MS-14Bを乗機とするようになる。





●乗機／MS-06
R-2 ザクII



その後、ライデン少佐は、コレヒドール暗礁空域での慣熟訓練のち、エース部隊の第一中隊長となる。
大激戦であったアッバオアックの攻防戦に参加しているが、以降の消息はあ

きらかでない。
宇宙世紀八〇年一月二十五日、戦闘中、行方不明として終身中佐へ昇進、軍籍からはずされる。



シン・マツナガ

軍籍番号／P M O 五五七六七四四一 S
所属／宇宙攻撃軍

略歴／宇宙世紀五五年、サイド3でマツナガ家の長男として生まれる。マツナガ家は、連邦のヤシマ家とならぶ名家で、その名のしめすとおり、東洋系の血をひく。一族のなかから軍にはいったのは、彼一人だけである。

開戦直前に軍にはいり、一等兵として出撃する。このときの乗機は、ノーマルカラーのMS-106CザクIIであった。つづくルウム戦役の功績により、パーソナルエンブレムつき、ホワイトカラーのMS-106FザクIIにのりつぐことになる。ルウム戦役では、直属上官の戦死によって戦場任官されているが、開戦時からの戦果が、戦艦一、巡洋艦五という大

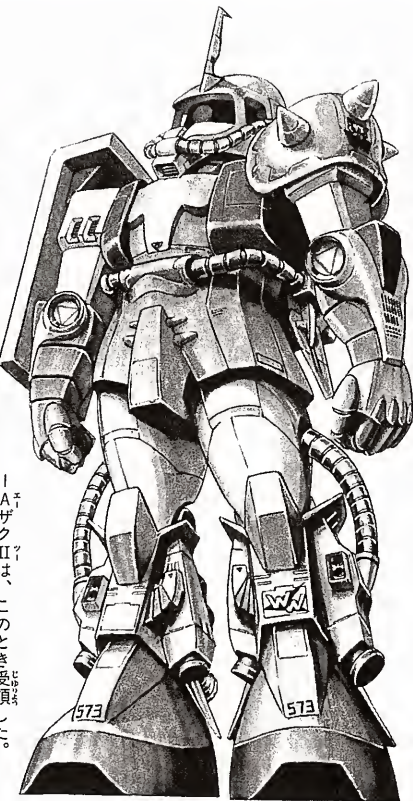
きなものであったため、二階級特進で中尉に昇進する。

ドブル中將が、戦場視察として乗機のカスタムタイプのザクで戦闘空域にでるときには、かならず護衛の任をつとめることになっていた。

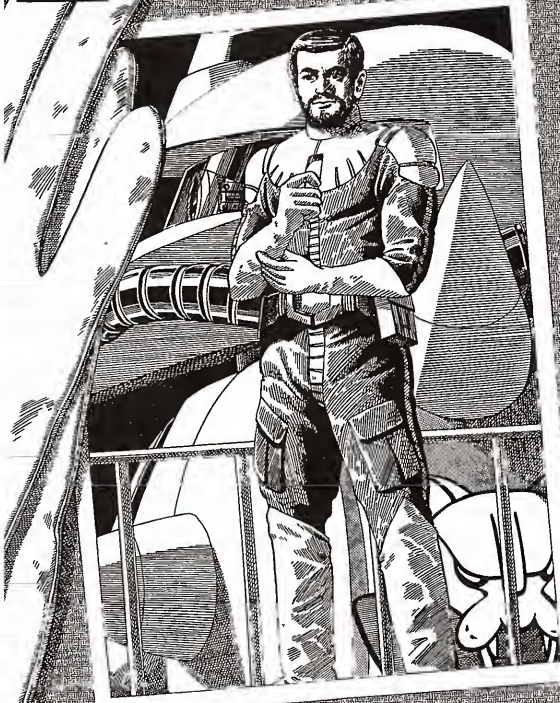
これは、パイロットとしての彼の才覚が、ドブル中將の目にとまるところとなったためである。



中尉に昇進したマツナガは、戦場任官の士官であるため、規定にしたがい、士官学校へ入学。卒業後は、形式的に出撃しただけで、すぐに大尉に昇進している。現在、有名な乗機であるMS-106R1



1 AザクIIは、このとき受領した。
本国のサイド3へ召還されていたので、ソロモン攻防戦には参加せず戦死はまぬかれたが、のこしてきた乗機は焼失してしまっている。以後はサイド3にとどまり、終戦をむかえる。



エリオット・レム

軍籍番号／MT〇二九六八三二二Z

所属／ジオニツク社開発部(軍属)

略歴／宇宙世紀三九年、サイドⅡ生まれ。

地球連邦総合大学および大学院を卒業。宇宙工学、核物理学、一般宇宙飛行

学の学位をもつ。小型宇宙機のライセンスをもっている。

その後、サイド3にうつり、ジオニツク社に入社。工作機器の設計を担当する。国防軍が編成され、「S・U・I・T」プロジェクト開始で、社内プロジェクトチームのスタッフとなる。はじめに手がけたのはMS-02だが、MS-05、MS-06の開発では、同社より出向し、佐官待遇の軍属となる。宇宙機の操縦もできる開発スタッフとして、みずからが開発したモビルスーツに、テストパイ

ロットとしても搭乗している。また、空戦マニュアルの作成にも参画した。

つづいて開発されたMS-06ザクⅡのR-1、R-2タイプのテストフライトにも参加した。このときは中佐待遇であった。

第二期主力空間戦用モビルスーツ開発のため、ジオニツク社にもどる。MS-06R-3、通称ザクⅢの開発チームのメインスタッフとなるが、同時期に進行していた軍の兵器開発をよそに、みずからのテーマを研究していた。

終戦は、サイド3の第十四コロニー工業区でむかえた。戦後も、サイド3への残留をのぞんだが、連邦政府の強い要望により、地球へもどり、連邦軍技術本部につき士官となった。



宇宙世紀79年、40歳の誕生日のときうつした写真が有名だ。写真でみるかぎり、スポーツマンのイメージがないからふしぎだ。

ロイグレンワズ

軍籍番号／P M O 四 五 八 九 一 五 六 G
所屬／地球攻撃軍

略歴／宇宙世紀四五年、サイド4生まれ。六七年に、連邦総合大学ムーア分校を卒業する。ヨーロッパ大陸からの移民で、ドイツ系ゲルマン民族の血をひいている。

アマリアとリミアという二人の娘がいる。七八年に、妻のケーティを宇宙船事故で失ったことから、ジオン公国に移住し、軍にはいった。

モビルスーツパイロットの訓練を受け、突撃機動軍第一機動歩兵師団に配属される。ブリティッシュ作戦時に、左目を負傷。失明はまぬかれたものの、戦線に復帰するのは、ルウム戦役後になる。復帰直後の部隊改編で、地球攻撃軍

第五地上機動師団に配属。戦で紅海におりる。以後、第二次降下作地上機動歩兵師団第一モビルスーツ大隊のA小隊、通称カラカル部隊の隊長として軍務につく。このときの階級は少佐である。その強引な戦闘は、多くの将兵にこのまれた。アレキサンドリア基地で終戦をむかえる。以後の消息は不明。



●カラカル部隊マーク



グリーンウッド少佐（旧姓／グルンワルド）の
写真は少ない。（宇宙世紀79年8月，出撃まえの
スナップ。北アフリカにて。）

イアン・グレーデン

軍籍番号／PMO五—三三八四六—二G

所属／地球攻撃軍

略歴／宇宙世紀五一年、サイド3で生ま

れる。軍にはいったのは早く、後方支援部隊に配属されていた。軍人にしてはめずらしく理論家で、先読みのきく人物である。

ある。

開戦前後は、モビルスーツ訓練部隊で、重力下でのモビルスーツ戦闘を教えた。七九年三月の部隊改編で、地球攻撃軍第二地上機動師団に配属とな

り、キャリフォルニアベース攻撃略戦に参加する。以後、同ベースの守備隊員として活躍する。

MS—06Kザクキャノンによる新部隊編成時に、それまでの戦

果が評価され、中尉に昇進。同部隊

の中隊長となる。

八〇年一月から06Kにて実戦に参加。

終戦までの戦果は、航空機三十四機、車

両七十一両、モビルスーツ二機であった。

終戦時におこなわれた調査では、ニュー

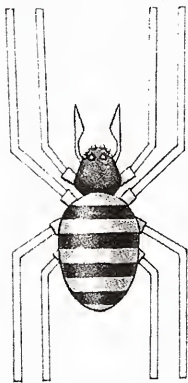
タイプとしての素質があったのではない

か、といわれている。

終戦は、ケープカナベラル基地でむか

える。翌年の十月に釈放され、新生ジオ

ン共和国に帰国している。



●パーソナルエンブレム



くわしい^{きつまい}撮影^{にちじ}の日時・場所^{ばしょ}は不明^{ふめい}であるが、宇宙^{うちゅう}
世紀^{せいき}79年^{ねん}10月^{がつ}の中尉^{ちゆうい}昇進^{しやうしん}のとき^{とき}の写真^{しやしん}ではないか
といわれている。

シヤア・アズナブル



軍籍番号／P・M・O五七一九七七二四三S

所屬／突撃機動軍

略歴／宇宙世紀五十七年生まれ。七五年に地球のマス家より、サイド3のアズナブル家へ入籍する。同年、士官学校へ入学。同期生にガルマ・ザビがいる。一年半後、戦時特例法によってくりあげ卒業

する。卒業時は首席であった。

教導機動大隊をへて、宇宙攻撃軍に配属される。一週間戦争の戦果により少佐

に昇進し、オリジナルマーキングのMS-106Sを乗機とする。ルウム戦役で

は、とくいの高速一撃離脱戦法により

「赤い彗星」の異名をとった。

宇宙世紀七九年九月、連邦軍のモビル

スーツと新型戦艦開発計画「V作戦」を

キャッチし、攻撃するが、うちもらして

しまう。この一連の戦闘で、地球攻撃軍

総司令官ガルマ・ザビ大佐を戦死させた

責任をとわれ、軍籍を剥奪される。

キシリア少将の命を受け、軍に復帰。

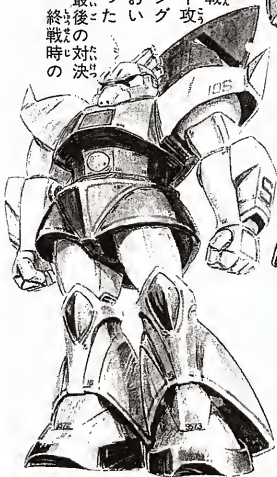
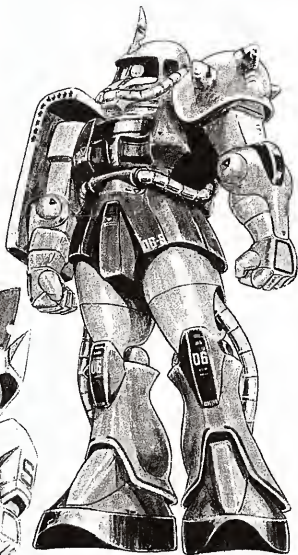
地球攻撃軍に、大佐として配属される。

同年十一月、突撃機動軍のニュータイプ

部隊、独立第三戦隊の司令官となる。



その後、テキサス攻防戦をへて、ア・バオア・クー攻防戦では、みずからジオングで出撃した。この戦場において、以前よりの宿敵であった連邦軍のRX-78-2と最後の対決をするが、相打ちとなる。終戦時の生死は不明。



使用モビルスーツは、開戦時がMS-06CザクIIであった。以後、ステイプザク、MS-07Sズゴック、YMS-14ゲルググ、MS-02ジオングとのりつぐ。

ジェラルド・サカイ



軍籍番号／P M O 四九二三七

八六四二A

所屬／突撃機動軍

略歴／宇宙世紀四九年、サイ

ド3で生まれる。学生時代は工学を専攻する。

七三年に入隊し、予備パイロットとして訓練をうけ、第一次編成のモビルスーツ機動部隊に配属される。ルウム戦役のさい、戦場任官で少尉に昇進する。

その後、グラナダつき技術士

官となる。八〇年一月、エース

部隊配属となり、MS-14Cに

搭乗する。終戦はサイド3でむ

かえる。14C以前の乗機は、M

S-106F、MS-1R09。



トーマス・クルツ



軍籍番号／E X O 五七〇〇四

二一九六 G

所屬／地球攻撃軍

略歴／宇宙世紀五七年、地球

生まれ。元連邦軍空軍所屬。大戦

勃発により、ジオン公国に亡命

する。家族は、サイド3出身で

ある。

入隊後は、地球攻撃軍第五地

上機動師団配属となる。MS-

06J からMS-07B を乗機

として、ゲリラ部隊G-27で戦

功をあげる。のちにグラナダで

エース部隊配属となり、MS-

14C を乗機とした。

アルバオア・クー攻防戦にて

戦死。

黒い三連星

ガイア オルテガ マッシュ

部隊略歴／黒い三連星。正式名称は、突撃機動軍第七師団第一モビルスーツ大隊司令部つき特務小隊。

ルーツは、七六年五月に編成された教導機動大隊までさかのぼることができ

る。このとき、第二中隊のD小隊には、

アーガイア軍曹(当時)のほか、オルテガ

曹長、マッシュ曹長(ともに当時)などが

籍をおいていた。乗機はMS-05Bザ

クIで、ダークシーブルーのペインティ

ングであった。このときは、まだチーム

は組んでいなかった。

宇宙世紀七九年一月の開戦時に、ガイ

ア軍曹を中心とした三機編成のモビル

スーツが、サイド5方面攻略部隊として

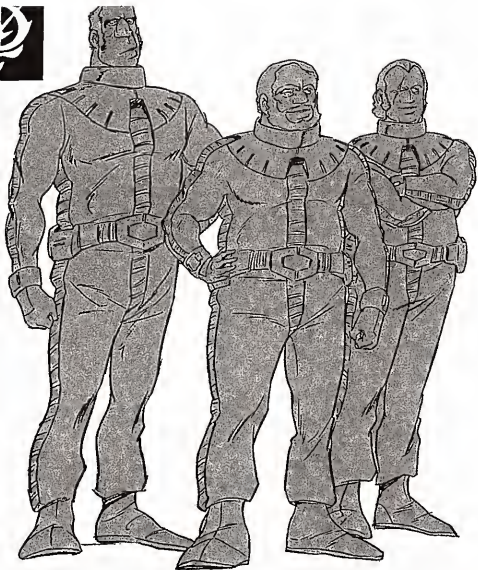
参戦した。ジェットストリームIIアタック

で活躍したが、作戦は失敗し、帰国する。

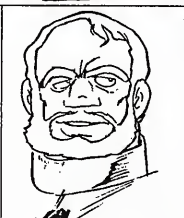
ルウム戦役から、少尉となったガイアを中心に、オルテガ、マッシュの三人でチームを組み、MS-06CザクIIに入る。その後、レビル將軍を捕虜にした功績により、乗機をSタイプのザクIIにグレードアップすることが認められた。



チームマークは、突撃機動軍のマークを使用していた。



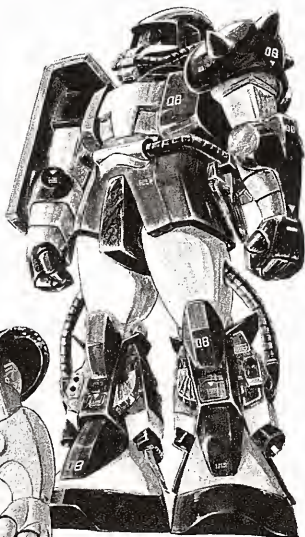
オルテガ



ガイア

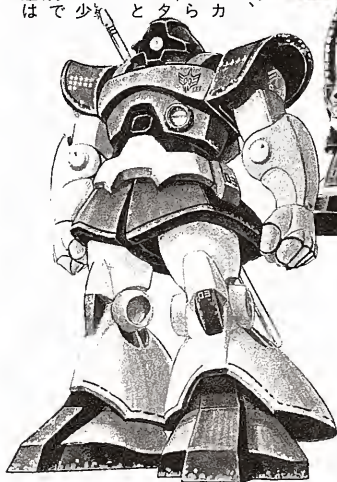


マッシュ



現在よく知られている黒、紫、グレーの三色のチームカラーの塗装は、この改編からである。その後、R-1Aタイプにのりつき、つぎつぎと戦果をあげていった。

黒い三連星は、キシリア少将の切り札的な存在の部隊であった。それだけに、待遇は



きわめてよかった。
七九年十月、陸戦トレニング後、オデッサ作戦にそなえるため、地球に降下する。乗機は、新型の陸戦用重モビルスーツMS-09ドム。RX-78との対戦で、小隊は全滅している。



■マルロ=ガイルム

地球攻撃軍第4地上機動師団所属。中尉（終戦時）。モビル
 ツーツ中隊に配属され、東部アジア地区制圧に戦果をあげる。
 乗機は、ダークブラウンに塗装されたMS-07Bグフ。こ
 の部隊は、チャイナレディとして有名なパーソナルエンブレム
 をつけていた。

■サイラス=ロック

地球攻撃軍第4地上機動師団所属。中尉（終戦時）。グフレ
 ディのパーソナルエンブレムで有名だ。東南アジアでの制圧地
 区拡大では、大きな戦果をあげた。とくに対戦車戦では、連邦
 軍も高く評価したほど優秀である。終戦直前におこった、連邦軍と
 のモビルスーツ戦にて行方不明になっている。

■アルフレディーノ=ラム

地球攻撃軍カリフォルニアベース直属支援戦闘モビルスー
 ツ中隊所属。少尉（終戦時）。グレーデン中尉を隊長とするザク
 キャノン中隊に所属している。対地支援の砲撃をとくとし、
 命中率も高かったが、ニュータイプパイロットではなかった。
 フロリダで終戦をむかえ、のちにサイド3へ帰国している。

■カーミック=ロム

地球攻撃軍第5地上機動師団第2モビルスーツ大隊所属。大
 尉（終戦時）。サイド2出身で、中東西部の遊撃部隊「スコルビ
 オ」の隊長をつとめていた。乗機はMS-07Dで、部隊マー
 キングのアラビアンは有名である。戦後は、開発が再開されたサ
 イド7に移住している。

構成/小田雅弘・石川秀一

メカニカルデザイン/大河原邦男

イラスト/上田信・増尾隆幸・石橋謙一・米田仁志

プラモ製作/小沢勝三・高橋昌也

レイアウト/藤森尚隆

協力/(株)バンダイホビー事業部

復刻版装丁協力/エイティ

講談社コミックスKCDX 第2176号

©創通エージェンシー・サンライズ

〈復刻版〉

機動戦士ガンダム

モビルスーツバリエーション②

ジオン軍MS・MA編

2006年7月26日 第1刷発行

2008年9月5日 第4刷発行

定価はカバーに
表示してあります。

発行者 五十嵐隆夫

発行所 株式会社講談社

〒112-8001 東京都文京区音羽2-12-21

☎ 編集部 東京 (03) 5395-3491

販売部 東京 (03) 5395-3608

印刷所 共同印刷株式会社

製本所 株式会社国宝社

Printed in Japan N.D.C.726 193p 15cm

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部(電話
03-5395-3603) へてにお送りください。送料小社負担にてお取
り替えいたします。なお、この本についてのお問い合わせはテレ
ビマガジン編集部へてお願いいたします。本書の無断複写(コ
ピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています。



ISBN4-06-372176-0

機動戦士ガンダム

《復刻版》

MSV/モビルスーツ バリエーション

ジオン軍
モビルスーツ
MS・
モビルアーマー
2 MA 編



テクニカル&ヒストリー

機動戦士ガンダム

《復刻版》

MSV / モビルスーツ バリエーション



テクニカル&ヒストリー

ジオン軍
MS・MA編
2

《復刻版刊行に寄せて》

本書は1984年講談社ポケット百科シリーズとして、MSVを中心とした当時のガンダム研究の成果を3分冊で集大成した『機動戦士ガンダムモビルスーツバリエーション』の完全復刻版です。第1次MSVムーブメントの全貌を語る貴重な原典資料として、ファンの皆様のお役に立てれば幸甚です。

復刻再刊に際し、印刷原版がすでに処分されていたため、やむをえず原本からの複写とさせていただきます。表記についても明らかな誤記、誤植以外は手を加えておりませんので、現在公式とされている設定やデータとは一部相違点があることをあらかじめおことわりさせていただきます。





MOBILESUIT VARIATION ②



9784063721768



1929979008000

雑誌 46295-76

ISBN4-06-372176-0

C9979 ¥800E (0)

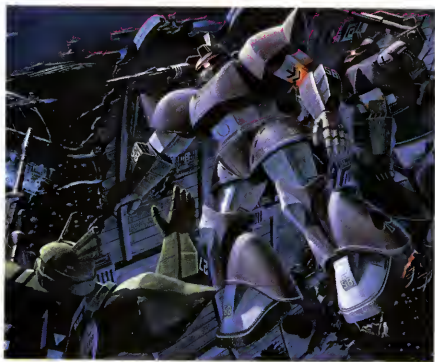
講談社

定価:本体800円(税別)



“グフ”や“ドム”などのモビル
スーツから、“エルメス”
などモビルアーマーまで、
ジオン軍ぐんのスーパーウエポ
ンのすべてをしょうかい紹介する！

© 創通 エージェンシー・サンライズ カバーイラスト／上田 信



KCDX

機動戦士
ガンダム

バネ
リビ
エル
ス
オ
ヨ
ン

復
刻
版

2

M
S
M
A
ジ
オ
ン
軍

編
集



講談社



KCDX

機動戦士
ガンダム

ガンダム シリーズ 映画版

2

復刻版

MS・M・A
モビルスーツ
モビルアーマー
ガンダム

総編

講談社